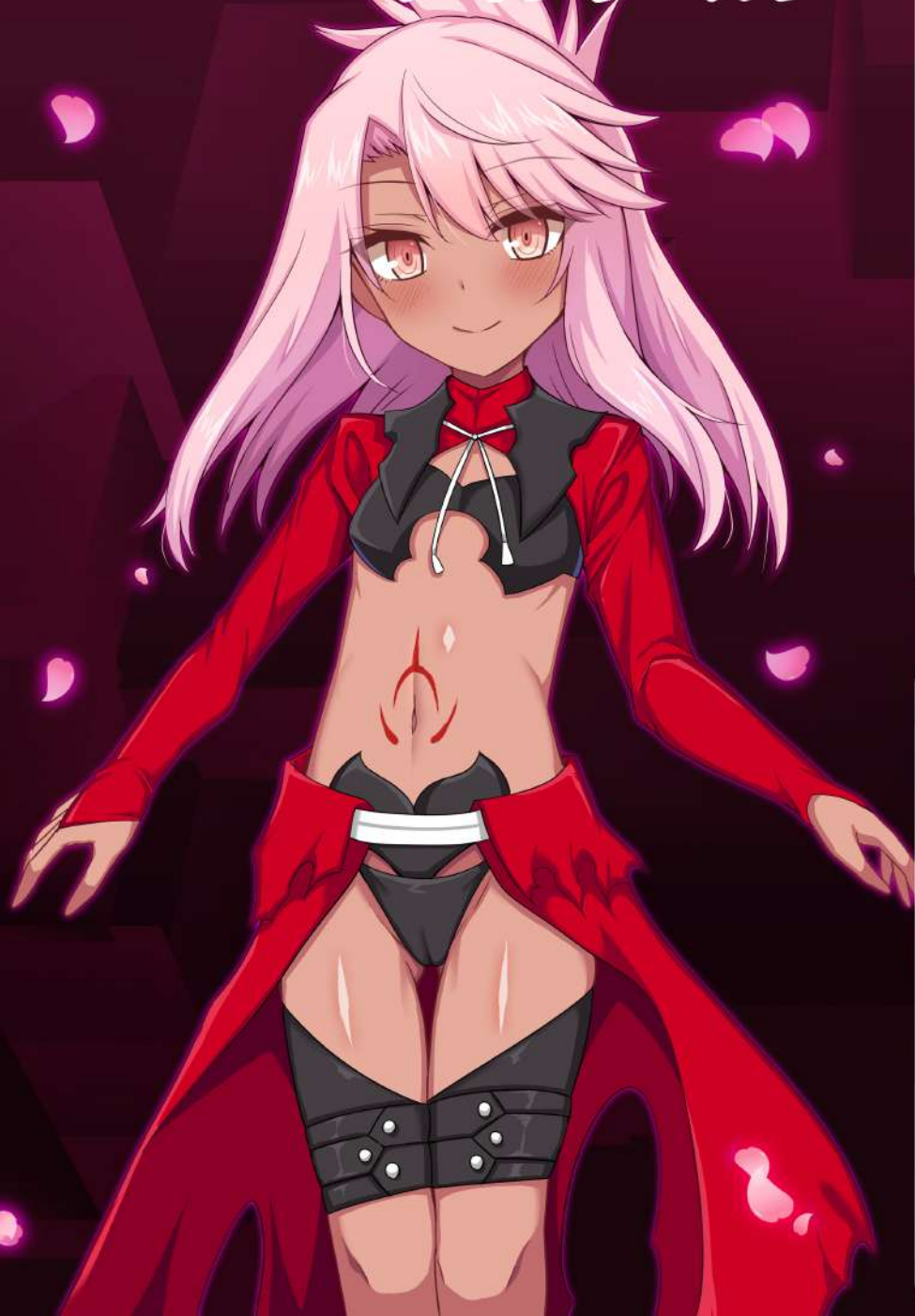


靈基No.06

クロエ・フォン
・アインツベルン



PROFILE

身長：138cm 体重：35kg

カルデアに突如現れた通りぐス魔。
魔力供給はおやつ感覚。

魔力供給回数：496回 絶頂回数：245回
好きな体位：寝バック 処女喪失日：召喚から2日目

妊娠確率：63%【安全日】

言わずもがなな魔力供給中毒。
事あるごとに求めてくるので、
いつデキたとしても不思議ではない。

STATUS

絆LV 100 
Next 0

性欲：A+	★★★★★	知力：B+	★★★★☆
体力：A	★★★★★	母性：D	★★☆☆☆
従順：D	★★☆☆☆	反抗：B	★★★★☆
淫乱：A	★★★★★	感度：C	★★☆☆☆

「あっ、おにいちゃんはっけーん！
ふふふ……今日も魔力供給、よろしくね♡」

SG1：慢性的魔力中毒

その出生、召喚形式により、常に魔力を必要としている状態(本人談)。通り魔的に魔力供給をせがまれるが、是非も無い。

SG2：小悪魔体質

つつい「相性の良い相手」をからかいたくなってしまう。彼女のそうした言動は、魔力供給を狙っているサインでもある。

SG3：自己顕示欲(姉)

イリヤに対し、自らが「姉」と確信している。決着はついていないが、常日頃「お姉ちゃんらしく」振る舞うことに余念がない。当面の目標は「イリヤより先にマスターの子どもを妊娠する」こと。

WEAK POINT

mouth：★★★★★

日々のキスによって磨かれた少女の口技は、およそ小学生のそれとは思えない。喉奥まで使って搾り取らんとするテクに、呆気なく射精を引き出されてしまうのだった。

bust：★★★☆☆

見た目はイリヤと瓜二つなのだが、自分の方が大きいと競い合っている。「協力お願いね、マスター♡」と毎日のように胸を差し出し……

vagina：★★★★★

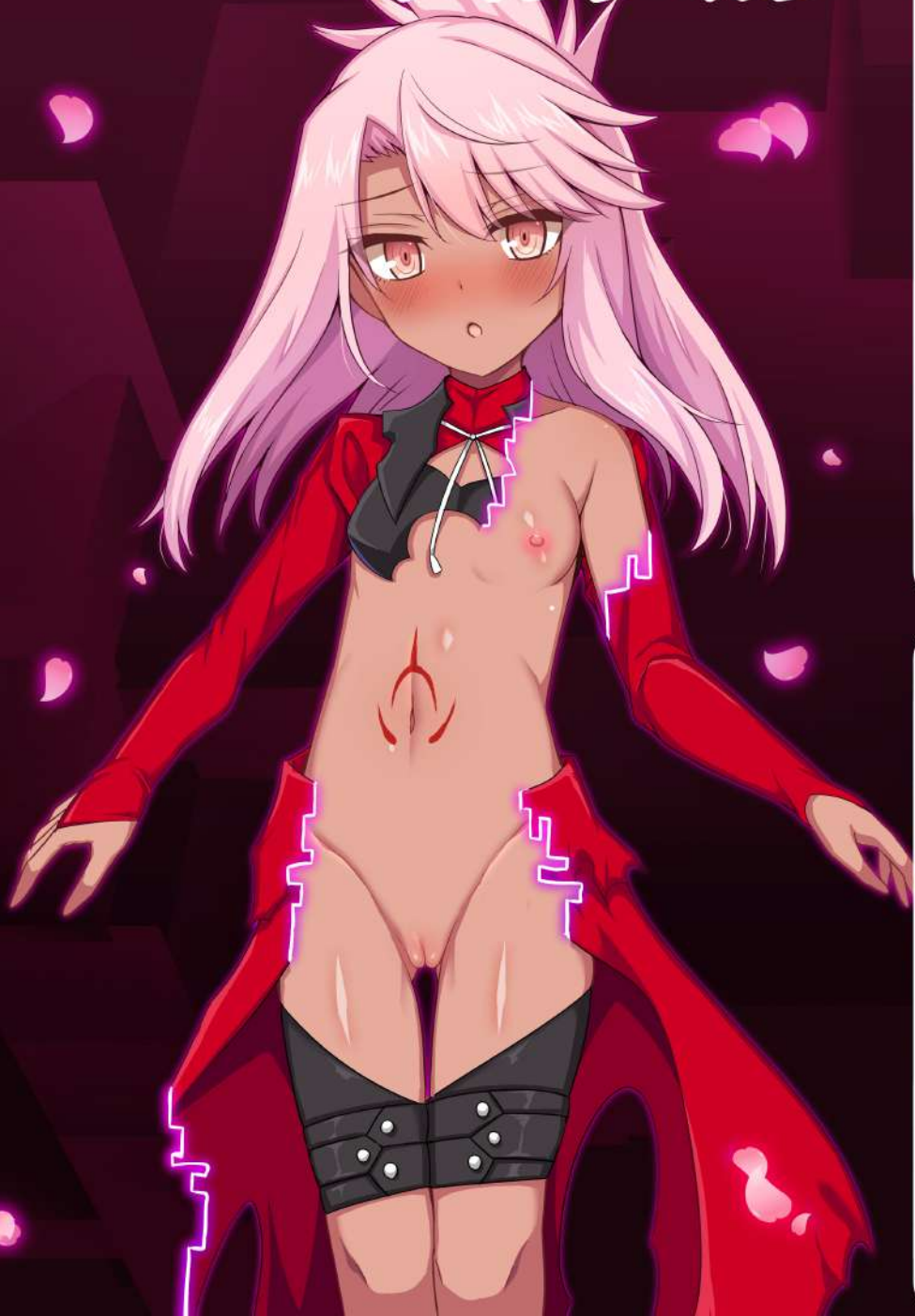
メスがき感たっぷりの膣内は、きめ細やかなデザインとツガママなムーブによって成り立っている。射精と同時に子宮口を押し付けるのが得意技。

LIVE



状態：♥♥♥

少女の小悪魔感が発揮されているのか、中々捕まえられない。彼女を「孕ませられる」時、それは徹底的に「わからせた」時だろう。



——カルデア廊下。

「おっにいっちゃんーっ♪」

「その声は……うわっ!？」

背後からの呼び声に振り返ると、半ば突進じみた勢いで少女が抱き着いてきた。

衝撃、そして転倒。かくして、地面に倒された自分の上にはある一人の少女が跨る事となる。

まったく鮮やかな抱擁^{ハグ}だった。

倒れた自分に跨るその少女は、いたずらな笑みを浮かべてきて。

「いててて……やっぱりクロエか。こういう挨拶の仕方はやめなさいって言うてるでしょーに」

「だってえー、お兄^マちゃん^スの背中^リって無防備で襲いやすいんだもん。あ、それともお兄ちゃん

ん的には正面から抱き着いてほしかった？ 今度からそーしてあげるけど？」

くすつと微笑を覗かせた少女は、わざとらしく胸元を広げてみせた。

そこから見える少女の健康的な肉付き。浅黒い少女の肌。もともと露出の多いクロエではあったが、そうやって見せられると彼女の身体というものを余計に意識してしまう。俺が恥ずかしそうに目を逸らすと、狙い通りとばかりに少女は面白く笑うのだった。

「それで、今日は何の用かな？ なにか用事があるなら付き合うよ？」

逃げるようにして話題を変える。それにクロエは思い出したように身体を起こして、

「じゃあ、せっかくだし付き合ってもらおうわね。っていうか今日はそれ目的で会いに来たんだし、さっそく向かいましょ。レ・イ・シ・フ・ト♡」

「それはいいけど……何のために？」

「ほら、私って今はサーヴァントじゃない？ お兄ちゃんのため、力を付けるには『実践』が一番ってわけ。貴方も私には強くなってもらった方が好都合でしょ？」

なるほど、そういう事なら構わない。レイシフトした先で戦闘訓練……戦力強化に付き添ってほしいという少女の要求には、二つ返事で了承した。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「……というわけで、密林エリアに到着です。先輩、体調に変化はありませんか？ 無いようでしたら、さっそく訓練を始めるとしましょう。前衛はクロエさんに、後衛はこのマシュ・キリエライトにお任せください。先輩は指示をお願いします」

「ふふっ、それじゃ気持ち良く暴れましょっか」

マシュにも声を掛け、レイシフトした先で三人訓練を開始した。

陣形はマシュが説明した通りである。既にその場はウェアウルフの群れに囲まれていた

が、サーヴァントである彼女たちは一切気圧される事なく敵と対峙して――。

獣人たちが一斉に動き出す。雪崩を起こして迫り来る怪物の狂気に、前衛を務めた少女はその手に二振りの刀を顕現、そして怪物の何倍もの速度で駆け出した。

「――いくわよっ!」

振り抜かれた剣閃が十字を描くようにして敵を切り倒す。赤い外套を風になびかせて、可憐に舞い踊るかの如くに剣を奔らせる。二体三体と散らしていく少女の動きは実に軽快だ。

「先輩、下がってくださいっ!」

瞬間、背後からの敵の強襲を、マシュが身の丈もある巨大な盾を構えて防御した。

ダムのように堅牢さを誇る絶対の守りは、たかが一体の獣人の攻撃ではビクともしない。防ぎつつ……跳ね返し、そしてマシュは身を低く構えた。途端、敵の身体を弓矢による攻撃が狙い撃つ。彼方からの射撃……クロエが持つ、アーチャーとしてのスキルだ。

「そっちを狙うなんて無粋ね。もっと大勢で来てくれないと退屈しちゃうわ」

二刀と大弓、それこそがアーチャーたるクロエの基本的な戦闘スタイルである。近接を軽くないなし、強力な射出スキルで敵を一掃。マスターとして眺める分には、実に絶好調な戦いぶりだと言えるだろう。

「山を抜き、水を割り、なお墮ちる事なきその両翼——鶴翼三連——！」

そして最後の一体を前に、少女は流れるような所作で必殺を見舞いする。

投擲した二刀が自在な軌道を描いて襲撃し、一瞬の内に都合三度、渾身の斬撃が敵の命を刈り取った。

獣声もいまや遠く記憶の中。一通りの敵を倒したところでマシユが休憩を提案する。周囲を木々に囲まれた少し広い空間に腰を下ろし、しばしの安息を貪った。

(それにしても……)

一人、空を見上げて考える。内容はクロエについてだ。

先程の戦い、少女はどこか納得がいかない様子だった。「やっぱり……」とか「足りない……」とか不満じみた呟きを漏らしていたし、個人的には文句なしの戦いに見えていただけに、クロエの不満げな様子はある種違和感のようにも思えてしまう。

すると、

「お兄ちゃん、ちょっとこっち来て」

「ん？」

少し離れた茂みの奥から、少女が手招きしてくるのに気が付いた。ちょいちょい、と自分を誘うその手は間違はなくクロエのものだ。あんな場所で何をしているのだろうと不思議に思いつつ、言われた通り近付いていく。……そこまでは良かったのだが。

「……あの、クロエさん？ これは一体どういう事ですか？」

「どういう事って……そういう事だけど？」

「いや、だからどうして裸になってるのかな？　そしてナチュラルに俺の股間に手を伸ばそうとしてくるのはどうしてなのかな！？」

当然的な疑問を少女に投げかける。当の彼女……クロエ・フォン・アインツベルンはと
言うと、何を今更……と言った感じの表情でこちらを見上げていた。

「お兄ちゃんだって分かっているくせにー。いたいけな小学生と茂みに二人、する事なんて一つしかないと思うけど？」

「それって、まさか——」

「そ。魔・力・供・給……お願いね、お兄ちゃん♡」

そう言うと、少女は俺の愚息をズボンから慣れた手つきで取り出した。

魔力供給と口にしたクロエの台詞の意味は分からないでもない。サーヴァントにとって魔力とは現界に必要な食糧であり、霊基を強化するための燃料でもある。それを摂取しないと願うことはサーヴァントとして自然な反応だ。だが、その手段が問題だった。

以前に噂で聞いた事がある。例えば魔力切れを起こしたサーヴァントがいて、効率的かつ迅速に魔力を供給するためには『性行為』も一つの手段である、と。クロエの言う「魔力供給」とはその意味合いを持っていた。

「実践が一番って言ったでしょ？ 私、お腹すいちゃった♡」

「実践って……それじゃあさっきのは!？」

「アレはただの運動、食事前のスポーツよ。目いっぱい身体動かしてからのの方が美味しくいただけるじゃない？」

何てことだ、初めから少女は魔力供給（意味深）する気満々でいたようだ。

曰く、この場所を選んだのも外の方が興奮するからというだけの理由で。

ただそれだけの理由で彼女は青空の下、褐色の肌を世界に晒していた。

「もう、お兄ちゃんってば色々考えすぎ！　こーんなにおちんちん固くしてるくせに、何を言っても説得力はないわよ」

「うっ……」

見れば、自分の息子は既に息荒くも堂々とした形姿を覗かせていた。戦いの直後という事もあって汗ばんだ少女の裸体は、興奮を呼び起こす起爆剤として十分な役割を果たしていた。

己の足元に座る少女……クロエの視線は、真っ直ぐにそれに向けている。グロテスクな男のイチモツに手を添え、妖艶な仕草に俺を誘う彼女は、今か今かと食事の時を待っていた。幼女にあるまじき魔性に抗えず、自分は――。

「ふふっ、ようやく素直になった♪　それじゃ一緒に気持ち良くなりましょ、お兄ちゃん」
「♡」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

木々に隠れたその中で、少女は男のそれを美味しそうに啜っていた。

「んむ、じゆる、じゆぶ、ずぢゆるうっ……ずずっ、ぢゆぶっ、ちゆぱっちゆぱ、んちゆう……！！ あはっ♡ お兄ちゃんの……んっ、すごく、おっきい……♡ んんう、えろ、ちゆぱっぬちゃ、んちゆうっ……ガチガチで、んう、エッチなカタチしてるう……じゆる、じゆるる、んちゆ、ぢゆ、ぢゆぶ、んん、んはあ……♡」

喉の奥深くまでを使って刺激する少女の口淫。

熟達したその動きには外見にそぐわぬ妖艶さがあった。

いつも挑発的な仕草や台詞で誘惑していたその姿が真実、こちらを誘惑するだけの実力に裏付けられていたように……クロエの口淫は想像を超えて刺激的だ。

「んんっふう……ぴちゃ、んちゆちゆぱっ、じゆるる……んん、んぢゆ、ぢゆぶう……♡」

肉棒が少女の口内で面白いように遊ばれる。ざらついた舌先が亀頭やカリの裏側を丁寧に激しく舐め回し、唾液の温かさに浸された。

もちろん、どれだけのテクニックを持つとうがその身体は小学生の幼いものだ。クロエの小さい口では肉棒の全てを含みきれはしない。なので咥えるだけでは届かない部分……陰茎の付け根や玉に至る場所には、舌を運ぶ事で愛撫を届かせた。

「おちんちん、ビクビクしてる♡ 現役JSのフェラで、感じちゃった……？ んっ♡」

舌をトゥッと滑らせ、亀頭の先端から裏スジまでを流れるように舐め回すクロエ。

相も変わらずいたずらな笑みを浮かべる少女の顔は、何ともまあ卑猥な色に染まっていた。

睾丸を揉み解すように刺激し、じゅぶじゅぶと口淫を続ける。

こんな幼い少女が自分のペニスを美味しそうに頬張っている姿はたまらなく魅力的だ。

それにクロエ自身が男のツポを知り尽くしているためか、的確なまでにそこを突いてく。小悪魔的な上目遣いは、ある種の凶器にも思われた。

「んじゅ、れろっんあ……んんう、ちゆる、ぢゆるるっ、ペろっ、えろ……♡ お兄ちゃん……おちんちん……んんっ、んむ、んぐ……ぢゅぷぢゅぱっずじゅっ……気持ち、良いでしよう……♡ 小○生に舐められて喜ぶとか、お兄ちゃんはどうしようもない変態ね……ぢゆるるっ♡」

腰が砕けそうな快楽に襲われる。罵るようなクロエの台詞も重なって、背筋をぞくぞくとした寒気が疾駆した。

口内を埋め尽くす男の象徴。それを嫌な様子一つ見せずに頬張る少女は、その舌で肉棒をくまなく愛撫する。頭を前後に動かし、音を立てて吸引するクロエの表情には、あどけなさど艶やかさの二つが内在し、小学生の口内を犯している事実もあって非常に蠱惑的な様相を映していた。

「ふふっ、お兄ちゃんの弱いところ……全部分かっちゃった♡ このあたりを、こーして、舐めてあげると……んちゅ、ちゆるっちゅぱっ、れろお、ずちゅうう……♡」

「っ……!!」

「声も出せないほど気持ち良くなってる、って感じ? んっ……お兄ちゃんのおちんぽ、ほんとに元氣……♡ じゅる、ちゅぷ、ぢゅぽじゅぷう……んじゅ……どう? 精液まろく、ぴゅっぴゅしたくなってこない? 私のお口でイキたいんでしょ……?」

更に激しさを増す少女のフェラチオ。幼いながらも大人顔負けのエロさを醸し出すこのロリサーヴァントの言う通り、肉棒は彼女の愛撫を受けて容易く限界を迎えていた。

スジやカカリを弄ぶ舌先。亀頭を全体的に刺激する少女の口内。その全ては魔力を欲する一年で動かされている。魔力……すなわち精液サダだ。濃密な白濁は時にサーヴァントたちのエネルギー源となる。少女がいやらしく求めている代物は、ペニスが吐き出したくしているもので間違いない。

「んふう、じゅぼっ、ぢゅぼっ♡ ちゅう、んちゅ、んじゅる、じゅるっ、ぢゅずうう……♡」

肉棒の震え具合を感じ取って、クロエもそれが近い事を察しているのだろう。

充血した亀頭の先端をちろちろと……陰茎をキャンディアイスのようにペロペロと……なんて可愛らしい愛撫はもうしない。息苦しさを覚えるほどに深くまで喉に咥え込み、少女はただひたすらに頭を前後した。

唾液が飛び跳ねる。瞳を閉じ、もはや何を語ることもせず一心不乱に口淫を続け――。

「くっ……で、射精るっ……!!」

「じゅるるっ……出していいよ、お兄ちゃん……♡ 私のお口まんこに、お兄ちゃんの精液いっぱいびゅるびゅるしてっ……じゅる、ぢゅる、ぢゅずるるるっ……!!」

トドメとばかりに少女の口淫が苛烈さを増す。

肉棒の奥まで吸い出され、彼女の口内で一番深い部分に亀頭が突き込んだ瞬間。

「んんっ、ふうんんんっ……♡」

肉棒が天上の快楽を爆発させる。

クロエの頭をがっしりと両手で固定し、逃げられないようにした上での口内射精。

どくん、どくん、どくん。ポンプのように欲望を排出するペニスは、少女の口内すべてを白く染め上げたところで長い射精を終了した。

「んんっ……♡ んあっ、はあ……おにいひゃんの……しゅごく、あひゅい……♡」

ぢゅぽん、と。精液を出し尽くした肉棒を引き抜くと、クロエが口の中を広げてみせた。自分が吐き出した精子の大部分は彼女の喉奥を通っていったが、それでも飲み切れる量ではない。白濁は少女の口内を隈なく汚し、溢れた精液が彼女の口から顎、首、胸元へとゆっくりと垂れ落ちていく。

実に卑猥な姿だった。舌の上に精液を乗せ、だらしなく口内を覗かせた幼女の素顔も。白濁とのコントラストが淫靡に光る、彼女の浅黒い肉肌も。

ぶるるっ。どうやらまだ残っていたらしい精液が、残滓となって放出される。それはクロエの全身を更にいやらしく装飾するに至り、少女は美味しそうに喉を鳴らした。

「……んふ、ごちそうさま♡ お兄ちゃんのロリコン精液、すっごく美味しかったよ♡」

クロエは大層ご機嫌な様子で微笑んだ。何はともあれ、これで魔力供給は完了である。少女も喜んでくれたようだし、そろそろ戻って――。

「……先輩？ そんなところで何をしているんですか？」

「ッ――マシュ……!?!」

その時、背後から聞きなれたある一人の後輩の声が聞こえてきた。

振り返るまでもなく察する。その声はマシュだ。おそらくは、いつまで経っても休憩から戻らぬ俺を心配に思い、こうして捜しに来てくれたのだろう。よく出来た後輩だとは思うが、今はマズい。ちょうどマシュの場所からでは木陰となって見えないだろうが、自分のすぐ足元では白く汚れた全裸の幼女が控えているのだ。見つければ色々終わること間違いない。

「あむ、うんっ……くちゅ、ちゅぱ……お兄ちゃん……♡」

「!？」

そんな絶体絶命の状況にも関わらず、クロエがまたしても肉棒にしゃぶりついてくる。まだ物足りないと言わんが如く、その瞳は切なさに震えていた。

どうしよう——その間もマシユは少しづつ近付いてきて。

どうする——その目が、耳が、犯行現場を確認する寸前にたどり着き。

「——わ、悪いマシユ! それ以上近付かないでくれ!」

「? どうしたんですか先輩、私が近づくと何かマズい事でも……?」

「あー……それは、その——そ、そうだ! 今、トイレ中なんだ! マシユに来られると、出るものも出ないって言うか、色々見られて恥ずかしくなるって言うか……!」

咄嗟に考え付いた出まかせに、途端、マシユの表情が一気に紅潮する。

「し、失礼しました！ 先輩が、その……用を足しているとは思わず、声を掛けてしまっ
すみません！ 私はこのまま下がりますので、終わりましたら戻ってきてください！」

「ああうん、そうしてくれると助かるよ……」

「それはそうと——クロエさんの姿も見えないのですが、先輩、心当たりはありま
すか？」

「え？ い、いやちょっと分からないな……とにかくもうちょっとしたら俺た……俺も戻
るからさ、マシユは心配しないで待っていてくれ」

そう言うマシユは「了解です、マスター」とだけ言い残し、もと来た道を引き返して
いった。素直な少女を騙した事への罪悪感が凄まじいが、この状況を見せるよりはマシだ
ろう。

「クロエ……」

「じゅぷ、んう……マシユ、行ったようね。これでもうちちょっとだけ遊べるね、お兄ちゃん」
♡

肉棒から口を離して、少女は小悪魔めいた微笑を浮かべる。そんな顔で見られては、自分としても堪える方が難しかった。

「それじゃ、今度はこっちに出してね♡ 膣内出しセックス……お兄ちゃんもしたいでしょ？」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

少し場所を変え、より深く森の中へと侵入する。

手近な木に縋り付くようにして両手を付け、少女は艶然とした瞳と共にお尻を向けた。

「お兄ちゃん、早くう……♡ わたしのナカに、はやくお兄ちゃんのを出し入れしてえ♡」

陰部を晒し、突き出す、いわゆるバックの体勢。お尻をフリフリと揺らして誘惑するクロエの魅力には抗えず、肉棒は彼女の膣内への挿入を望むべく再起を果たしていた。

幼く、そしていやらしい。少女が後ろ手にスジを広げると、くぱあと膣穴が口を開くのが見て取れた。およそ男を受け入れるに不十分な大きさだったというのに、クロエの雌穴は喘ぐように震えている。

もう我慢はならなかった。魔力供給という当初の目的も忘れ、このロリサーヴァントに大人としての仕置きをしてやらねばと本能が叫ぶ。衝動に支配された理性は躊躇う事はない。彼女の腰に両手を回し、背後から襲うようにして、その瞬間――。

「ん、ああっ……んん、はあああああっつ……！！！」

狭い膣道をこじ開ける。歪に肉が広げられるそんな音と共に、少女の口から歓喜の声が漏れ出した。後ろからの一突きにクロエは身体をゾクゾクと震わせ、待ちわびた肉棒の感触に喜びを露わにする。

「はあ、あああん……お兄ちゃんが、はいつてきたあ……♡」

まったくいやらしい表情だった。

幼女が見せてはいけない艶やかな声と顔に、男としての嗜虐心がそえられる。手加減はしないぞという宣言を告げると、クロエの膣内がぶるると痙攣した。

「いいよ、お兄ちゃんっ……♡ わたしの子供おまんこで、好きなだけ気持ち良くなつてっ……んっ、ふうあっ、あっ、んああああっ——♡」

転じて、ストロークを開始する。自分の膣内を掘削される感覚に少女が鳴き叫び、肉棒は彼女の深いところまで潜入した。

そう、これは断じて魔力供給などではない。常日頃から自分を誘惑してくる悪いサーヴァントへの、けしからんが故に行う「お仕置き」だ。

「あっ、あん、やんっ……！ お兄ちゃんの、固くておっきい……♡ あっあっ、私、お兄

ちゃんと、セックスしてるっ……んんあっ、ひゃっ、あっんあ、くうんんっ……♡」

「このロリビッチサーヴァントめっ……けしからん幼女には、こうだっ！」

「あっ、あっ……♡ お兄ちゃんの、奥まで入ってきてるう……！ もっともっとお仕置きしてえ♡ クロエはご主人様のエッチな奴隷でしゅ、いっぱいお仕置きしてくだひゃっ…… あっはっ、んっ、ふあ、ひううっ……♡」

手加減抜きの抽挿。本来、それで懲らしめる筈だったのが、かえって少女を興に乗らせる結果となってしまう。以前にも冗談ぼく奴隷だなんだとクロエは口にしていたが、今回はその時の比ではない。積極的にお仕置きを望むロリサーヴァントの姿にはたまらないものがあつた。

だとしても自分のやる事は変わらない。幼い膣道をこれでもかと広げ、最奥を何度もノックする。パンパンと肉の弾ける乾いた音を響かせ、少女のロリ穴を何度も拷問した。

「あんっ、もっとお……♡ もっと、はげひくしてえっ♡ クロエのJSおまんこ、お兄

ちゃんのおちんちん好きになってるからあ……んっ、あっあんっ、あ♡♡♡ 気持ち良い、気持ち良いよお……っ！！」

開放された空間の中、少女の快楽に溺れた嬌声が響き渡る。

何といっても、ここは外なのだ。自室で行うセックスとはわけが違う。近くには誰もいないと分かっているが、青空のもとの姦淫に背德的な何かを隠せなかった。

クロエは「興奮するから」というだけの理由でこの場を希望したが、なるほどそれは正解だった。マイルームのベッドでするよりも更に激しい興奮がある。それに外であれば、どれだけ愛液を散らそうが構うこともあるまい。

「やっ……お兄ちゃん、好き……♡♡♡ んっ♡♡♡ もっと私で気持ち良くなってえ……あぁっ♡♡♡」

肉棒は何度も少女の膣内を攪拌し、ロリ穴から大量の蜜液を掻き出さん。

その度に快楽を喘ぐクロエだったが、いまいち反省の色が見られない。

普段から性を弄んでみせる少女にとって、この程度の快感はおやつのようなものだ

ろう。

ならば――。

「ひゃっ、ああっ……!?!? お兄、ちゃん……そっちは……♡」

狙い通り、少女の口から悲鳴じみた嬌声を引き出す事に成功した。

自分が弄ったのは、彼女のお尻にある小さな菊門だ。バックの体勢のため、よく見えるようになっているそれに指を挿れた途端、クロエの様子にこれまでにない反応が現れる。

「お兄ちゃん、らめえ……っ! わたしが悪かった、からあ……っ、お尻の穴に指を入れるの……んっ、ふっ、はっああっ♡ だめえ、壊れちゃううっ……♡」

流石のクロエもこれにはお手上げのようだった。

膣穴よりも更に狭くか細い少女の菊門。指一本が限度という広さのそれを弄ぶと、少女の身体が面白いように震え出す。痛いとも気持ち良いとも異なる感触。苦しきにも似た違和感。それは彼女の平静を打ち砕くに十分な威力を持っていた。

「ごめんなしゃ……あつ、んっ、はうん、くうあつ、あっあん、あつ、はっ……♡」

肉棒と指による両穴への刺激。未知の快楽を前にクロエが涙を浮かべて悶えだす。意趣返しとばかりに「こっちに挿れてみようかな」などと口にする、少女は必死になって懇願した。流星に意地悪がすぎたか、などと思えば――。

「まだ、だめえ……♡ そっちはまだ、狭いからあ……っ！」

「……まだ、ね。だったら今回はこっちだけで……」

「んあああ……♡ お兄ちゃんのおちんぼ、もっと激しくなってえ……んんんっ♡」

菊門から指を引き抜き、肉棒へと意識を集中する。快楽にトロけきった膣内は、大きな男のものを、今ではもうすんなりと受け入れるようになっていた。

限界に近い。子宮口を幾度となくノックし、少女の絶頂に近い事を察する。足を小鹿の

ように震えさせ、身体を小さく萎縮させた少女は、この上なくか弱い存在に見えてしまう。

「あっ、はぁアアっ……お兄ちゃん、もっと激しくしてっ、壊れるくらい、もっとっ……♡」

だということに、クロエは更なる快楽を要求した。ロリ穴全体を使って肉棒を咥え込み、声を抑える事もなく求め出す。

「いいよ♡ だしてっ♡ お兄ちゃんも、精液びゅーびゅー出したいんでしょっ……♡」

どうやら少女には全部筒抜けだったらしい。絶頂の近い彼女同様、こちらもまた限界が近く、ペニスの抽挿を繰り返す腰の前後運動は、自然と加速を果たしていた。

ロリサーヴァントに野外で膣内出し。そんな背德的すぎる未来に興奮しつつ、肉棒は着実に射精の準備へと入っていく。いちおう念のために内外どちらへの射精がいいかと尋ねると、少女のロリ膣が陰茎を離すまいとして収縮した。

「なかつなかに出してえ……♡ 大好きなお兄ちゃんの子種、クロエのロリまんこにナカ出

ししてえっ……!! あっあん、あっ、はっ、あんっ、ふう、あうんっ、あっあっ、んああっ……」

その台詞が引き金だった。

クロエのいやらしい要求に我慢ならず、肉棒は瞬時に臨界点を突破した。

彼女の身体を木に押し付けるようにして強く襲う。結合部はペニスへとだらしなく吸い付き、出し入れすることによって面白いほどに変形した。膨張した肉棒が膣内を埋め尽くし、一番深い部分へと亀頭が到達する。その瞬間、溜まりに溜まりきった欲望が勢いよく爆発した。

「んっ、んああああああああつっ————!! あっ♡ ふあ♡ お兄ちゃんの、なかつ♡ なかにっ♡ あったかいの、びゆるびゆる来てりゆううう……♡」

勢いよく放出された精液が、少女の子宮の中へとなだれ込む。絶頂を迎えたクロエの身体はびくびくと痙攣を起こし、膣内射精の味わいに歓喜している様子だった。

要求通り、自分の持てる精液の全てを注ぎこんでやる。やがてひどい倦怠感に襲われる

と、永い射精は終わりを告げた。それと同時に、魔力供給という名の性行為も終了して。。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「あっ、お待ちしてました先輩。どうやらクロエさんも一緒のようですね。それではさっそく訓練の再開を……先輩？ 何やらお顔が優れないようですが、どうかされましたか？」

急いで元の休憩場所へと戻ると、そこで一人俺たちの戻りを待っていたマシュが心配そうな顔を向けてくる。優れない……やつれている事だろうか。無理もない事だ。あれだけ精液まりよくを持っていかれたのだ。多少、貧血気味になっけていても不思議ではない。

「一方でクロエさんは……何やら、すごく元気な様子です。若干、お肌がツヤツヤしているような気がしないでもありません」

「んー、そんな事ないと思うけどなー♪ さ、魔力は十分。食後の運動と行きましょ」

「食後？ クロエさんは、いったい何を食したのでしょうか？」

「な、何のことだろうね……おやつでも持って来てたのかな、ははは」

訝し気に見つめるマシユの瞳に、どきっと心臓が跳ね上がる。

幸いマシユにそれ以上気にした様子はなく、再び訓練の場所へと移動を開始した。ホッと深い安堵の溜息を零しつつ、彼女の後ろを歩いていく。すると、クロエがこそっと囁いてきて、

（魔力供給……またいつかお願いね、お兄ちゃん♡）

秘密に話された少女の呟き。

盪惑的なその約束に、搾り取られる運命を予感した

靈基No.07 イリヤスフィール・フォン・アインツベルン



PROFILE

身長：133cm 体重：29kg

どこにでもいる普通の小学生(だった)。異常事態はわりと慣れっこ。

魔力供給回数：186回 絶頂回数：297回
好きな体位：正常位 処女喪失日：召喚から46日目

妊娠確率：90%【危険目】

初潮を迎えたばかりではあるが、既に準備は整っている。本人は「自分にはまだ早い」と躊躇しているが、もしできたとしてもそれはそれで……

STATUS

絆LV 100 ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥
Next 0

性欲：B+	★★★★☆	知力：C+	★★★★☆
体力：A	★★★★☆	母性：D	★★☆☆☆
従順：A	★★★★☆	反抗：D	★★☆☆☆
淫乱：B	★★★★☆	感度：A+	★★★★☆

「ぐ、ぐくにだけは負けたくないかも……！だからお、お願いしますマスターさんっ！」

霊基No.07 イリヤスフィール・フォン・アインツベルン



SECRET GARDEN EX

SG1：主人公体質

変なことに巻き込まれたり、無茶(エッチ)なお願いを随分引き受けてしまう体質。事あるごとにコラボや商品化の話が出てくるのもこのせいかもしれない。

SG2：暴走癖

「かわいいもの」を前にした時、まれに「おかしなスイッチ」が入る。親友に(性的に)襲い掛かったりすることもしばしば。

SG3：結婚願望

年相応に「綺麗なお嫁さん」に憧れを抱いている。サーヴァントである今、年齢の問題を気にする必要もない。いつプロポーズされても良いよう紅ちゃんの元で花嫁スキルを習得中。

WEAK POINT

rip：★★★★★

キスをするのが大好き。舌を差し出すと何も言わずに絡め出す。唾液を交換するとすこく幸せな気分になるそう。

bust：★★★★☆

マスターに何度も揉まれた(揉ませた)ことによって、胸だけでもイけるように。揉ませた後は「今回より私の方が良いですよ、その……色々」と感想を聞いてくる。

vagina：★★★★☆

快感が奔るとざわざわっと震えるので分かりやすい。子宮を先っぽでぐりぐりっとされるのが好きで、いつも大人顔負けのエロい声を鳴き出す。

LIVE



状態：♥♥♥

「あやしい薬」によって妊娠しやすくなっている状態。もちろんマスターには内緒。なので状態としては「超危険日」。

ある日、あるサーヴァントの自室にて。

「最近、クロがマスターさんに……その、迷惑かけてるって聞いたんですけど……」

「迷惑？ わたしが？」

きょとんとして首を傾けたクロエの目の前には、彼女と瓜二つの顔が存在した。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。クロエにとっては、文字通り姉妹のような存在である。尤も、どちらが姉かと言われたら彼女たちは決まって「自分が姉だ」と答えるだろう。

そんな姉妹でありライバルでもあるクロエの部屋を訪れたイリヤの胸中には、最近耳にしたある一つの疑惑が渦巻いていた。このカルデアにおける唯一のマスターの存在。彼に対する姉妹クロエの言動が、その……なんだか最近、いかがわしいのだと。

「んー、迷惑なんて掛けてないと思うけどなー。私はただ、お兄ちゃんと魔力供給してるだ

けだし……」

「そ、それが問題だって言ってるの！ この前はお風呂で……その前はおトイレで……私、見たんだからね！ マスターさんの後を付けてクロと一緒に入っていくの……そ、その後、二人の……エ、エッチな声が聞こえてきたりして……！」

記憶を振り返るようにして語ったイリヤの表情が、見る見る内に赤くなっていく。

対して、クロエの様子は穏やかだった。まるで「それがどうしたの？」と言わんばかりの視線で見つめる少女に、およそ悪びれるだとか後ろめたいという気持ちは微塵も無いのだろう。

「っ——と、とにかく！ マスターさんにあんまり迷惑かけちゃダメなんだからね！」

「……もしかして嫉妬してるの？」

「嫉妬じゃないもん！ クロのバカっ！」

ある意味で虚を突いてきたその無垢なる閃きは、イリヤを激しい羞恥に襲わせた。動揺しながらも、少女は否定と拒絶を繰り返す。それから数日経った、ある日のこと。

(ううう……クロってばこんな深夜に呼び出して何のつもりなんだろう……?)

しんと静まり返ったカルデアの廊下を、イリヤは一人寂しく歩いていた。

誰もが寝静まった真夜中。その辺りを目指して私の部屋に來なさい、とは姉妹であるクロエの言。イリヤは言われた通り、彼女の部屋を目指して暗い廊下を進んでいた。

やがて目的地が近づくと、クロエの部屋から明かりが漏れている事に気が付いた。それに何やら「音」も聞こえてくる。話し声……というよりは叫び声のような。足音を消し、扉を少し開け、静かに中の様子をうかがうと……

「あっ♡ あっ♡ いいよ、お兄ちゃんっ……♡ もっといっぱい、私のおまんこ気持ち良くしてえ……! あっ、あん、はあん……♡ お兄ちゃんの、しゅごくおっきいよお……

「♡

(えっ……あれ、クロと……マスターさん……!?)

イリヤの瞳が大きく見開かれる。あまりの光景に少女は声を失った。

(あれ……エッチな事、してるんだよね。クロとマスターさんが……あんなに激しく……)

ベッドの上で交わる二人の男女を、イリヤは興味深くも観察する。噂に聞いていたとはいえ、その現場を直接見た事は無かった。それ故、眼前の景色には信じがたい思いがあったのだろう。

どちらも見知った顔だ。しかし見慣れぬ表情もしている。あれは本当に自分の知っている人たちかと疑うイリヤだったが、やはりどう見てもそれは現実だった。

(クロ、すごくエッチな顔してる……そんなに気持ち良いのかな……?)

扉の隙間から覗き見える、姉妹の知られざる素顔。

それは苦痛に歪むのでもなく、屈辱に涙ぐむのでもなく、快楽を知った女の顔をしていた。後ろから激しく突かれる、ある種襲われているようにも見える筈なのに、まったく嫌な様子が見えてこないのは何故だろう。

「クロ、射精すよ……！ ぜんぶ呑み干せ……！！！」

「うんっ♡ お兄ちゃんの精液、クロエのロリマンコで全部受け止めてあげるっ……♡
だから好きだけ出して、好きだけびゅーびゅーして♡ あっ、あん、あっあっ、んあ、
はっ、んんんんっ——！！！」

やがて、二人の情事にも終わりが訪れた。マスターである少年がクロエをベッドに押し倒し、深く繋がった状態で射精が行われる。

びゅくびゅくと音が聞こえてきそうなほどの膣内射精。それを幼い身体一つで受けきる少女の相貌は、完全に快楽の色に染まっていた。見てはいけない、見るべきではないものだとイリヤは考える。なのに、不思議と目は逸らせなかった。目を逸らせずにいた。

「ふう……クロエは相変わらずだな。三日前だってしただろう」

「だってえ、お兄ちゃんとのセックス……すっごく気持ち良いんだもん♡　ねえお兄ちゃん、今日はこのままもう一回戦いっちゃわない？」

まだ物足りないのか、クロエは艶然とした仕草で誘惑し。

それに彼も頷いて。クロエがくすつと笑った瞬間だった。

「そうね……今度は部屋の外で覗き見してる女の子も交えましょ。それでいいでしょ、イリヤ？」

「……ほえ？」

唐突に己の名を呼ばれ、少女は激しく困惑する。

聞き間違い……自分の耳を疑った。しかし、隙間から見える姉妹の瞳は真っ直ぐに彼女を向いていた。そこに隠れている事も。一部始終を覗いていた事も。すべて。すべて見透

かされた状態で。

「イ、イリヤ……!!?」

「あう……マスター、さん……!!?」

この状況をお膳立てされたと気付くのに、そう時間はいらなかった。気付いていなかったのは、それこそ自分とマスターだけなのだろう。今更逃げる事も出来ず、イリヤはその部屋に入る事を余儀なくとされた。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「ほえ……これが、マスターさんの……お、おちんちん……♡」

足元に侍らせた幼女の内の一人、銀髪赤目の少女は驚きを露わにした。

鼻息が擦れるほどの距離。それこそ目と鼻の先にありし男の象徴を前に、イリヤはごく

りと生唾を飲み干す。息苦しく脈動する陰茎の姿に、驚愕を隠せずにいた。

「お兄ちゃんってばホントに元気だね。あれだけ出したのに、まだ足りないの？」

もう一方、イリヤと瓜二つの目鼻立ちをした褐色の少女・クロエは嗜虐的な笑みを浮かべてそう言った。彼女の言う通り、肉棒は準備万端と言ったように十全の勃起を果たしている。興奮もやむなし、と言った感じだ。こんなにも可愛らしい少女たちを前にして、反応を見せない方があり得なかった。

「どう、イリヤ？ 怖気づいちゃった？ 今ならまだ戻れるけど？」

「ばっ、バカにしないで！ わたしだって、これくらい——」

クロエの挑発じみた発言を、イリヤはムキになったように一蹴する。

自分も正直、困惑しているのだが……ここまで来て据え膳を喰わぬというのも無理な話だろう。己の罪深さを自覚しつつ、少女二人との享樂に走っていく。

(ふにっ、ふにゅっ——)

「ふひゃっ！」

「あんっ♡」

手始めとばかりに、イリヤとクロエの頬を勃起したそれを使い撫でてやった。すると二人は驚いたような恍惚としたような、そんな短い声を鳴き、頬を擦られる肉棒の感触を味わうように目を閉じた。

「ひゃう……マスターさんにおちんちんで、ほったたプニプニされてる……♡」

「お兄ちゃんってばちょっと変態っばいよ……でも、これ——」

「ん、んう……えへへ……♡　なんだかマスターさんにいいこいいこ……されてるみたい

です。それに、おちんちんの匂いがすごく伝わってきて……ん、ああ……♡」

左右の頬を交互につつく肉棒に、すんすんと鼻を鳴らして喜ぶイリヤとクロエ。

もちもちとした弾力は成長過程にある少女ならではのもの。柔らかく、そしてしっかりとした二人の頬は、亀頭の先を擦りつけているだけだったというのに奇妙な心地よさを感じさせた。

「マスター、さん……はあ、んあ……♡」

「お兄ちゃ……あ、んんっ……すう……♡」

背徳的な光景だった。二人の顔に自らのものを擦り付けるその様は実に禁忌的だ。

まるでペットに餌をあげるような気持ちである。それが自分の分身とも言うべき触覚となれば、このぞくぞくと込み上げる征服感にも納得か。

「ふふっ、言われなくても……お兄ちゃんのおちんちん、舌でいっぱい気持ち良くしてあ

げるね♡ ん、んんっ……れるっちゅぶ、ちゆるう、ぷちゅ、ちゅぼっ、ペろっ、ちゆるるっ……♡」

二人のちょうど中間の間で反り立った肉棒。まるで柱のように勃起したそれを、クロエの舌が愛撫を開始する。流星はクロエだ、俺が頼むまでもなく少女は全てを察してくれていた。

ちゆる、ぴちゃ、ちゅぼ。クロエの可憐な唇が、小さな小さな桜色の舌先が、まるで掃除をするように走っていく。亀頭の先端にキスをしたかと思うと、そのまま下降して、サオとなる部分を丁寧に濡らしていった。

「ぼええ……クロがマスターさんのおちんちんに……っ」

その様子を動揺まじりに見つめるイリヤ。経験豊富なクロエと違い、どこか奥ゆかしさを感じさせるこの少女にとって、やはりこの光景は手に余るものだったのか。

「わ、私も負けてられないっ……!! 私だって、それくらい……んむっ、んちゅ——

ちゅう、ちゆるるっ……ちゅっ……ちゅむ、れるっ、ちゆる……♡」

だが、イリヤにとって姉妹アロエに先を行かれる事はこの上なく認められない事実でもあった。悍ましくそびえ立つ肉棒への恐怖よりも、隣のサーヴァントへの対抗心が上回ったらしい。負けじとイリヤは、クロエの真似をするようにして口淫を開始する。

「はむっ——ん、ちゅう……♡ れるっ、えおっ……じゅず、じゅうう——♡」

「ちゅぶ、ちゅぱっ、ぢゆるうう……♡ んっ、んふう……ふあ、ああん、んくっ……♡」

左右から挟み撃ちにしてくる二人の舌。競争か何かのように忙しなく舌を走らせるイリヤとクロエの愛撫は、形容しがたい気持ち良さがあった。

小学生二人に肉棒を舐めさせている……その現実には背徳感を覚え、全身がぶるるっと振動する。少なからずクロエにも負けん気があったのだろう。イリヤが参加してからの彼女の口淫は、それまでよりも激しく稼働していた。気のせい、ではあるまい。

「ひょお、かな……ますひゃあ、しゃん……ん、んっ……わたし、うまくれきてるかな……？」

舌を懸命に動かしながら、イリヤが上目で尋ねてくる。

気持ち良くない筈も無いだろう。まだ恐怖が残るのだろう少女の愛撫は、拙さとひたむきさが程よくミックスされていた。子供がいじらしく頑張る姿は実に微笑ましく、肉棒をしゃぶる淫猥な光景とのギャップによって相乗的な快楽を生み出していた。

「お兄ちゃ、んっ……ちゅ♡ わたしはどう……？ イリヤより上手くできてる……？」

対して、クロエの口淫は的確の一言に尽きた。

イリヤ以上の速さと強さで肉棒を舐め回す少女。泡立つほどの愛撫に、果てしない気持ち良さを覚えてしまう。亀頭から始まり、カリ、スジに沿って睾丸までも舌で舐め弄る少女は、文句を付けられないほどに完璧だった。

「ああ、二人とも上手だよ……！ 二人の舌、すごく気持ち良いよ……！！」

だから正直な感想を告げる。二人とも甲乙が付けられないほどに魅力的で、双子のような少女たちの口淫に肉棒は音を上げつつあった。

「ん、ふう……えへへ、マスターさんに褒められちゃった……♡ もっともっと気持ち良くしてあげますね。なんていうか、こう……コツも分かってきたし」

「言うわね、イリヤ。それじゃあ、どっちがお兄ちゃんをイカせられるか勝負よ！」

「望むところ！ 絶対に負けないんだから！！」

更に激しさを増すイリヤとクロエの舌使い。互いに負けまいとした闘志に燃える二人は、一心不乱にペニスを舐め始めた。

「んちゅ……ん、じゅう、ぢゅむっ……ぢゅぶ、ちゅぶあ、れろっ、れる、ぴちゃ……♡」

「あむ、んっ、んんっ……♡ んちゅう、ちゅうっ、ちゅうろつれろお、んむ、ふあ……♡」

唾液が弾ける。吐息が溢れる。

二人は貪るように肉棒に吸い付いた。

腫をトロンとさせて口淫に夢中になる姿はこれ以上ないほどに蠱惑的だ。まるでこれ無しでは生きられない、水を求める魚の如き必死さ……それに耐えきれず、陰茎は射精のカウントダウンに突入する。

「っ——んむう……!!　じゅぶ、じゅるっ……ぢゅぼぢゅぽっ、ずじゅるっ……♡」

「ひひゃっ……!!　ク、クロってば急にどうしたの……!!?　マスターさんのおちんちんを、そんな、口いっぱいに啜えて——」

だが、その瞬間。射精に移ろうとした刹那、クロエが口全体を使って亀頭を啜え出した。その意図を読み切れていないイリヤは、ただただ不思議に見つめている。ここで経験の差が出てしまったか。程なくして気が付いたイリヤではあったが、その時にはもう遅く、クロエの口の中で欲望は爆発した。

——びゅっ！　びゆるる……！　どびゅ、どびゅううう……！！

「んんんんっ……！？　んっ♡　んきゅ♡　んっんっ……ふはあ♡」

腰が碎けるほどの衝撃。二人に挟まれての口淫に、肉棒はだらしなくも我慢を解く。勢いよく放出された己の白濁は、容赦なく少女の口内へと注がれた。今頃、クロエの口の中は白く汚されてしまった事だろう。ロリサーヴァントへの口内射精に罪悪感を抱きつつも、流し込まれる精液の勢いは止まらない。

「んふ、お兄ひゃんの精液いただき……♡　すぐく熱くて……んっ、喉……火傷しちゃうかも……♡」

「ズ、ズルいよクロ！　わたしだって、マスターさんの……んむう！？」

射精を独り占めにしたクロエを、イリヤは激しく糾弾する。

が、そんな彼女の文句は強引にかき消されるに至った。なぜなら――。

「ん……ちゅっ、じゅぶ、んむう、ん、んっ、ぢゆる、ずじゅう……♡」

「ぢゅず、じゅるる、んぢゅうう……♡ れろおっ、くちやぴちや、んちゅ、ちゅむう♡」

目の前で繰り広げられる少女たち二人のディープキス。

求めたのはクロエの方だ。彼女はイリヤの顔を捕まえると、そのまま唇と唇を突き合わせてしまう。それも単なる接触ではない。舌と唾液、そして彼女の口内に溜まっているであろう白濁を流し込む、強烈な口づけだ。

「ふふ、お裾分け♡ 嬉しく思いなさい、イリヤ……んちゅう♡」

「クロお……♡ ん、くちゅ……ちゅぶ、ぴちや、れろ、れるう……ごくん♡」

まさしく吐き出された精液を分かち合うかの如く。

二人の繋がった口の中で、くちゆくちゅと精液が混ぜられる。なるほど、この光景は良いモノだ。可愛い女の子たちが自分の精子を仲良く分け合う景色は、本当に素晴らしい。

「はふう……これが、マスターさんの……♡」

初めての男の味に、恍惚と身体を震わすイリヤ。

クロエとのキスによって、彼女の口元は唾液と白濁に汚れていた。頬は紅潮し、少女の白い肌とのコントラストがよく映える。

さて、そこで少し戸惑った。自分も、彼女たちも、まさかここで終わ리だとは微塵も考えていないだろう。であれば必然的に、選択が必要となってくる。自分の前にはうずうずと待ちわびる少女が二人。どちらと先に繋がるか、それを考えなくてはならない。

「……仕方ないわね。ここはまあ……姉として？ 先を譲ってあげるのも吝かじゃなくよ？」

「ほえ？ クロ、今なんて————きやああっ!!??」

やれやれと肩を竦めたクロエは、戸惑うイリヤを強引にベッドに投げ出した。そのまま少女の背後へと回り込み、羽交い絞めにするようにしてイリヤを拘束する。彼女の浮世離れした衣装に手を掛け、クロエは俺を誘うような仕草でそう言った。

「さ、お兄ちゃん。イリヤのおまんこ、もう準備万端みたいだし……初めて、奪っちゃおっか♡」

「ふええええええ……！　ますたーひゃ、見ちゃ、ダメっ……んんんっ♡」

クロエの指によって、ずらされた下着の内側からイリヤの秘部が露わとなる。すっかり熟したように濡ればそった陰裂が広げられると、イリヤが恥ずかしく悲鳴を鳴いた。

魅入ってしまう。イリヤの綺麗な割れ目、幼すぎるその膣穴。クロエの細く整った指先は、俺に見せるただそれだけのためにイリヤのそれを開いている。くぱあと広げられたイリヤのロリマンコは、準備万端を告げたクロエの台詞通りに程よく発情していた。

「ほら、イリヤ。自分から言わないと、お兄ちゃんも分かってくれないよ。それ、どうしたいの?」

「ひゅんっ……♡」

クロエは意地悪くそう告げる。イリヤの雌穴を軽く愛撫し、答えを急がせる。

「う、んっ……お願いします、マスターさん」

震える声で、イリヤは。

「私の初めて……もらってください♡ マスターさんのおちんちんを、私の……おまんこに、入れて……気持ち良くしてください……♡」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

亀頭を膣の入口に。覆い被さるようにして少女を包み込む。

「ん、んんっ……ますたー、さん……！ ふあっ、あっ……ん、くう——！！」

み、ちいっ——そんな歪な音と共に、少女の純潔が少しずつ散らされていった。腰を押し付け、肉棒を彼女の体内にうずめる。窮屈とした少女の膣道。内部は温かく、そして奇妙な弾力に富んでいる。それを亀頭で掘り広げ、一気に——突いた。

「はっ、ん、あっああっ、んあああああ……♡」

少女の最奥を強引にノックする。その瞬間、イリヤの口から甲高い嬌声が叫ばれた。性感を刺激されたが故の喘ぎ声——というだけではあるまい。そこには無理をしてまで挿入した事による苦痛も滲んでいた。顔を上ずらせ、涙ぐむ表情を見せてきたイリヤだったが、不思議と嫌な様子は浮かんでいない。

「あっ、ああっ……♡ わたし、マスターさんとセックスしちゃってる……♡ 小学生なの

に、おちんちん入っちゃってるよお……ん、んう……♡

「ごめん、イリヤ……無理そうだったら言ってくれ」

「えへへ……マスターさんにナデナデされるの、好き……♡　すぐく幸せな感じがして……んっ、あっ♡　やだ♡　声、でちゃう……♡」

せめてもの贖罪に、彼女の頭を撫でてやった。すると緊張が解けたようにイリヤは表情を緩ませて、諸手をあげて抱き着いてくる。自分もそのまま、彼女の身体へ溺れるように沈んでいく。

「は……あっ、んっ——きて、るっ……♡　マスターさんの、奥まで……んっ、はああっ♡」

勢いよくストロークを開始した。

少しばかり解れただろうか、多少なりとも形の広がった膣道を己のイチモツが蹂躪する。

未成熟ながらもしっかりと女性の意味を成しているイリヤのロリ膣。正真正銘、小学生である少女とのセックスは、自分に凄まじい背徳を覚えさせた。

「や、あぁっ……！　ますたーさん、ますたーさん♡　んっ、はっあんっ、ふぁっ、んぁ……マスターしゃんの、おっきい……♡　イリヤのおまんこ、壊れちゃうよぉ……♡」

大量の蜜に濡れた少女の膣を、これでもかと突き穿つ。狭く閉じ切ったロリ穴を己のカチとして広げる度に、イリヤの口からは艶めかしい声が漏れ出した。

口の端から涎を垂らし、顔も身体もだらしなくトロけさせて。

イリヤは快楽を喘ぐ。思い切り腰を振るい、最奥にある子宮口を突けば突くほどに声とは大きくなり、小さな小さな穴を自分専用を作り替えられる事を受け入れていた。

「好き、好き♡　ますたーさん、ますたーさん……♡」

「ふふふ、イリヤったらすごくエッチな顔しちゃって……そんなにお兄ちゃんのおちんちんが気持ち良いんだ」

「うん、気持ち良い……よお……♡ マスターさんとのセックス、しゅごく気持ちよくて……
んあっ♡ あっ、あくっ……はっ、ふあっ、あんっ、あっ、んああっ……♡」

俺とイリヤの性交を間近で眺めるクロエは、イリヤを辱めるような言葉で以て盛り上げてくれる。普段から自分と楽しんでいるだけに、今日この瞬間だけはイリヤに譲ってあげる……そんな意思が見えてくる彼女の笑みだ。

「ふあっ……あっ♡ ああっ♡ あんっ♡」

すっかり雌の顔をするようになったイリヤに興奮し、挿挿は更に加速した。

膣壁に自分の証を刻み、自分専用の穴として強く押し通す。

いつの間にか、イリヤの声からは完全に苦痛の色が消えていた。幼い身体を征服される快感に、純粹な喜びの叫びが鼓膜を殴打する。元から高い声色が更に高く響き、脳を蕩けさせる魅惑の嬌声として俺の神経を刺激した。

「ん、ああっ……やつ、はあん♡ やつと……マスターさんと、一つになれた……♡ おちんちん、ずっと欲しかったのに……寂しく、てえ……んっ、ひいんっ♡」

幸せそうに呟かれたその言葉。ずっと……とはどういう事だろう。

「だってっ……マスターさん、クロとばかりしてるんだもんっ……♡ いっつも声だけ聞こえてきて、んっ、寂しかったんだからあ……んあああっ♡」

ぞくぞくと、背骨を興奮が駆けていく。

イリヤのその台詞は、何とも子供らしいとか女の子らしいとか……微笑ましさを感じさせると共に、それだけ自分を……男を欲していたといういやらしさが健気でたまらない。

彼女に寂しい思いをさせてしまった事を詫びると同時に、更に深く激しく突いてやる。そうして顔を近づけ、耳元で囁くように……これからはクロエとだけではない、イリヤとも日常的に繋がる事を約束した。

「うん、嬉しっ……♡ マスターさん、大好きっ……あっ、ああっ——♡」

子宮口を亀頭につんざかれ、イリヤが果てしない快楽を叫んだ。

既に肉棒は、彼女が一番深いところに精液を吐き出したいと悲鳴を上げている。それが腰を激しく動かし、イリヤのロリ膣を自分だけのものにしたいとスパートを掛けていた。

「ひゃっ、あっ……マスター、さん……奥、熱くてっ……♡」

「っ！」

「おまんこのなか、きゅんって来てるっ……♡ 気持ち良いの、来ちゃってるうう……♡」

少女のトロけきった声に、絶頂が近い事を確信した。

射精と雌イキが同時に出来ると理解し、腰を大きく前後する。

それが全てだった。自分が持っているものを全て出し切るかの如く。少女の膣に。イリヤのおまんこに。俺の全てを流し込んだ。

——どびゅううう、びゆるる、びゅぶ、どびゆ、どびゆるるるっ……！！

「あっ、あっ——♡ おく、おくっ、にい……！！ イリヤの、一番おくに……マスターさんの精液、出てるう……あっあん、いくっ、いっちゃうっ……あっ、お兄、ちゃんっ……しゅき、大好きっ、いっばい、中に出してえっ……♡ ツ——イツ、くうううう……！！」

腰が震える。びゆるびゆると精液が吐き出され、全てを吸い尽くされる感覚がした。

びゅっ、びゆる、びゅううっ——ただの一滴として残さずイリヤの子宮内に注ぎ込む。彼女もその気があったのか、俺の腰を足で絡め取り、深く密着した状態での膣内射精を希望した。

「せつくす……セックス……私、マスターさんと……一つに……♡」

やがて長い射精を終えると、くたっとしてイリヤは倒れた。

流石に疲れたのだろう。幼い身体に無理をさせてしまった事を誤り、艶やかに光る銀髪

をそっと梳かしてあげる。すると少女はえへへ、と微笑むのだった。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「お兄ちゃん♡ 次は私の番ね、待ちくたびれちゃったわ」

うん、何となくそんな気はしてた。

クロエのことだ、見ていただけで満足はしないだろう。寧ろ余計に求めてくるのが、彼女というサーヴァントなのだ。ああ、それは理解している。

「流石に……今日は……もう勘弁して。また三日後……魔力が溜まった時にでも」

「えー、そんなのつまんなーい。私だけおあずけとか、そんなの絶対にいやー」

わざとらしく駄々をこねてくるクロエ。だがすまない……もうすっからかんなのだ。これからクロエの相手をしてあげるだけの気力は、もう自分には存在しない。

さて、どう説得したものか……と考えていると、ふと股間の方に奇妙な感覚を覚えた。それは徐々に大きくなり、痺れるほどの刺激を与えてくる。下の方を見ると、そこには――。

「っ……イリヤ、どうして……!?!」

「くちゅ……私だって、もっとマスターさんになりたい……もっとほしい……♡」

萎えしぼんだ肉棒を、奮い立たせんとして口に咥える少女がいた。

可愛らしく縮こまったペニスにそう刺激を与えている理由は一つ。イリヤもまたクロエと同じく再戦を要求しているという事だ。もちろん、それを黙ってみているクロエではない。

「次は私の番っ……イリヤはさっきまでしてたでしょ……!」

「クロの方こそ、今日まで散々してきたじゃないっ……!」

デジャブを見るような、自身の陰茎を美味しそうに舐めだす二人の少女。

仮にもう一回の性交が可能だったとして、その一回をどちらが貰うかは難しい選択だ。順番的に考えればクロエだし、総合的に見れば回数劣っているイリヤを選ぶべきかもしれない。

「お兄ちゃん……♡」

「マスターさん……♡」

上目で見上げてくるイリヤとクロエ。

……仕方ない。あれだけは使うまいと考えていたが、腹を括るとしよう。たとえ戦いに負けても、令呪を使い果たしていても、アレさえ使えばコンティニューできる。そう、聖晶石があればね

靈基No.08 エウリュアレ



PROFILE

身長：134cm 体重：30kg

男の憧れ。理想の女性。完成された「偶像」としての女神。
今はマスターで——マスターと遊ぶのが趣味。

魔力供給回数：185回 絶頂回数：234回
好きな体位：後背位 処女喪失日：召喚から56日目

妊娠確率：75%【危険目】

女神である自分がマスターに孕まされるわけが無いと思っている。
その一方で、孕ませてほしいとも願っている。

STATUS

絆LV 100 ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥
Next 0

性欲：B	★★★★☆	知力：A	★★★★☆
体力：E	★★★☆☆	母性：B	★★★★☆
従順：D	★★★☆☆	反抗：B	★★★★☆
淫乱：D	★★★☆☆	感度：A	★★★★☆

「ふふふ、私が欲しい？ ええ、じゃあ特別にね。
ちよっとだけよ、うふふ……♥」



SG1：崇拜願望

煩く、乱暴な人間は苦手、醜いものは嫌い。でも信仰されるのは悪くない気分。というかもっと崇めて。そう、数多の男を魅了する「アイドル」のように。

SG2：シスコン

姉妹たちのことが好き。特にメドゥーサには愛しすぎるあまり歪んだ愛情表現を向けてしまう。「ね、メドゥーサ。ちよっとこれ着てみなさい♡」

SG3：気分屋

とことんまで甘えて、一方で破滅や苦しむ様子を楽しむ。少女にとって「男」は自身を求め・支配する存在ではあるが、彼女もまた「男」を支配する。ある種のユディト・コンプレックス。

WEAK POINT

eye：★★★★★

男を射殺す女神の視線。真の女神は目で愛し殺す。ただ最近は見つめ返されると「……………生意気」とだけ言って顔を赤らめ去っていく。

leg：★★★★☆

真の女神は足でも殺す。「こんなのが良いの？」と最初は自信無さげだった彼女も、今では「ほら、これが好きなんですよ♡」と弄ぶように足で責めてくる。

vagina：★★★★☆

姉妹の中で最もキツく、感じやすい。激しく動かすと更に収縮し、子宮口がばくばくと快楽を求め開いてしまう。

LIVE



状態：♡♡♡

「完成された女神」である彼女は妊娠しない。神性を帯びた卵子はそれ自体が難攻不落。……排卵している時点で既に陥落しているのは言うまでもない。

霊基No.09 ステンノ



PROFILE

身長：134cm 体重：30kg

男の憧れ。理想の女性。完成された「偶像」としての女神。
マスターを足蹴にして遊ぶのが日課。

魔力供給回数：185回 絶頂回数：234回
好きな体位：立ちバック 処女喪失日：召喚から56日目

妊娠確率：63% 【安全日】

女神である彼女は自身の肉体情報を感覚で理解できる。
危険日が近付くと自然とマスターのことを考えたり……
そんな自分の変化に戸惑っている。

STATUS

絆LV 100  Next 0

性欲：C	★★★★☆	知力：A	★★★★★
体力：E	★★★☆☆	母性：C	★★★★☆
従順：D	★★★★☆	反抗：B	★★★★☆
淫乱：D	★★★★☆	感度：B	★★★★☆

「好きよ、マスター。好き。大好き。
……………いいえ、嘘よ。うふふ……………♡」



SECRET GARDEN EX

SG1：偏愛主義

気に入ったものには優しいが、どうしてもいい存在にはとことんまで冷淡。そんな彼女に愛されるということは、つまり「興味が無くなるまで愛し尽くされる」ということである。

SG2：シスコン

姉妹たちのことが好き。特にメドゥーサには愛しすぎるあまり歪んだ愛情表現を向けてしまう。

「ちょっと来て、メドゥーサ。……良いから来なさい。……来てくれないと、私——」

SG3：寂しがり屋

しつこく、馴れ馴れしいものが嫌いな彼女だが、妹たちが側にいないとたちまちテンションが(普段よりも)下がる。排他的であり束縛的。今ではマスターも側にいてくれないと不安になるらしい。

WEAK POINT

face : ★★★★★

ステンノ(様)の特別な笑顔。相手は死ぬ。なんてことはないアルカイクスマイルですら効果は絶大。

「スマイル—つください？ふふふ、だ—め♡」

funny : ★★★★★☆

淫裂に沿って舌を奔らされるのがお気に入り。感じやすい彼女はそれだけで愛液を涎の如く漏らしトトロ回にするが、絶対にその事実を認めようとはしない。

vagina : ★★★★★☆

奥行き長い膣道、その奥に子宮が位置している。ゆっくりとヒダの一つ一つに擦るかのように挿入されるのが好きで、一番奥に到達した瞬間、少女は幸せそうな吐息を漏らす。

LIVE



状態：♡♡♡

女神なので高い判定で妊娠を防ぐ(失敗する)。それでもマスターが諦めない知っているので、時間の問題だと本人は考えている。

目覚めると、両手が鎖に繋がれていた。何を言ってるか分からないかもしれないが、つまりはそういう事である。

「あら、気付いたようね。マスターったらとても面白い顔をしているわ、私」ステシノ

「ええ、本当に面白いわ。期待通りの表情よ、私」エウリュアレ

ベッドに寝そべる自分を、見下ろす形で佇む二人の少女。

なんだこれは。もう一度言おう、——なんだこれは。

ベッドに寝ているのは理解できる。そこまでは覚えている。それはいい。問題は、どうして自分の両手が縛られているのか。万歳をするように上げられた自分の右手と左手は、ベッドのヘッドボードと繋がれるかたちで拘束されている。そして目の前には怪しきロリ女神が二人……すなわち、真実はいつも一つ。

「エウリュアレ、それにステシノ……！　もしかしなくてもこれお前らの仕業か——！」

「うふふ、良い恰好よマスター。とーってもね♡」

「可愛いわ、マスター……ふふふ、私ったらつい……ごめんなさいね♡」

アーチャーのサーヴァント・エウリュアレ。そして、アサシンのサーヴァント・ステンノ。瓜二つの目鼻立ち。双子、あるいは鏡合わせの存在。こうして並べられると見わけが付かないほどにそっくりな二人のサーヴァントが、目覚めた自分の眼前に立っていた。

「くっ………いつたい、何をするつもりだっ………!? こんな手錠………っ、外れない………!?」

ガチャガチャと鎖を鳴らし、精一杯の抵抗を叫んでみる。

この状況、この体勢、どう考えても不吉な予感しか浮かばない。夜這い的な何かをされることは今までにも（彼女たちに限らず）あったわけだが、手を縛られるなんて事は流石に初めての経験だ。

「ふふっ。さあて、いつたい何をされるでしょう♡」

俺の叫びに対し、エウリュアレは悪戯な笑みを浮かべて。

「マスターの大好きな……イケナイ事よ♡」

ステンノはわざとらしく、口に指を当ててそう言った。

途端、二人の嗜虐的な笑みから狂気が溢れ出していく。悪魔というには可愛らしく、天使と呼ぶにはいたずらな、そんな女神たち。やがてベッドに腰かけた二人は、その綺麗にすぎる素足を伸ばして……自分のそれをズボンの上からそっと踏みつけた。

「っ……………！」

唐突に訪れた刺激、二人の足によって踏まれたその部分。

もちろん偶然などではない。ステンノもエウリュアレも、分かってそこを刺激したのだ。小鹿のような素足で。絹のように白く繊細なその足裏で。自分のそれ——つまりは陰茎だ。ズボンの内側で待機しているそれを、二人は愉しそうに愛撫する。

「ん、っ……可愛い顔、ゾクゾクしちゃう……♡」

「こういうのが良いのでしょうか？ ほら、こんなに喜んでる……♡」

さすさすと、足を器用に動かしていく二人。

自分でも、それが徐々に硬くなっていくのが分かってしまった。

男と違って硬さの無い、少女の柔らかな足裏。それもただ踏んでいるだけではない。慎重かつ攻撃的な、男を喜ばせるための足使い。女神である彼女たちは、それをいとも容易く行使する。

「貴方ってば、こーんなのが気持ち良いのね。ふふ、どうかしら？ 女神わたしの足で扱かれるとか、この世で最も幸せな事じゃなくて？」

肉棒を足で刺激しつつ、エウリュアレが自信を覗かせ訊いてくる。

悔しいが、それには頷くしかなかった。この状況に何ら思うものがないわけではなかつ

だが、それでも身体は正直だ。彼女の足に優しく撫でられ、肉棒はズボンの内側で息苦しさを感じている。今すぐにでも外に出たいと叫んでいた。

「あらあら、マスターってば随分と苦しそうね。ふふ、仕方のない人……♡」

すると、徐にステンは足の動きを変えてみせた。

踏む、のではなく、摘まむ。明らかに目的を変えた少女の足指は、ズボンのチャックを器用にも摘まみ取った。親指と人差し指で挟み、それをゆっくりと降ろし下げていく。

「きゃっ♡ ……んもう、相変わらず凶悪なんだから」

「私たちに足で弄られて、もうこんなに硬くしちゃったのね……いけないマスター♡」

エウリュアレとステンノ。二人が驚いたように目を丸くする。

その視線の先にあるのは、飛び出すようにして現れた肉棒だ。硬く勃起したそれは、彼女たちの足による愛撫で十分に興奮しきっている。両手が使えない以上、隠そうにも隠せ

ないのが現状だ。

「ん、んう……マスターの、生き物みたいに動いてる……♡ 足でされるのが、そんなに気持ち良いのかしら……ほら、こんなにビクビクって……ふふっ♡」

「こういうの……得意ではないですけど。こうでいいのかしら？ ……えいっ♡」

まるで遊ぶように、あるいは実験するように愛撫する二人の足。

絶妙な柔らかさの足裏と、絶妙な力加減で繰り返されるそれは、手でされるのと変わらない、あるいはそれ以上といった具合に肉棒を喜ばせる。

それに体育座りをしている二人の股の間からは、彼女たちの下着となる部分が見え隠れしていた。女神を自称する彼女たちらしい、純白のそれである。

「あら？ ……ふふふ、マスターったら目つきがいやらしい……♡ そんなに私のおまんこが見たいのでしたら、ほら……♡」

俺の視線を感じたのだろう、ステンノが自らの下着を横にずらしてきた。

当然、その内側にあるべき秘部が露わとなり、幼女の見事な縦スジが視界に飛び込んでくる。綺麗で可愛らしい子供の割れ目。縦一本の亀裂によって表された、少女の膣口。いまだ汚れを知らぬような、そんな聖域だ。

「良いアイデアね、^{ステンノ}私。なら私も……♡」

「うふふ……マスターのおちんちんは正直ね。こんなに硬くなってる……♡」

すると、ステンノに続き、エウリュアレもまた己の秘所を見せつけてきた。

少女二人の割れ目。あまりに禁忌的なそれを見てしまった事で、肉棒は更に硬さを増していく。それこそ石化の魔術を受けてしまったように……二人の陰裂を目にしながらの足コキに、興奮が際限なく呼び起こされていった。

「ふふ、もっと気持ち良くなっていいのよ……？ 特別に足でイカせてあげる、光栄に思い

なさいなマスター♡」

エウリュアレは更に足の動きを激しくし、

「気持ち良いなら気持ち良いと……正直に言っではどう？ 我慢は身体に毒よ？ ほら、ほらっ♡ イキそうなんでしょう？ 出したいのでしょうか？」

一方のステンノは、挑発するようなセリフと共に愛撫を繰り返す。

二人の小さく柔らかい足に踏まれ、揉まれ、扱かれていく内に、尿道を込み上げる熱の存在に気が付いた。なまじ抵抗もできないだけに堪える事も難しく、立て続けに訪れた快楽は衝撃として、我慢という名の壁を容易に突き壊した。

その瞬間——

「きゃあっ!？ マスターの、すごい量……♡ おちんちんからぴゅっぴゅしてる♡」

「元気が良いのね、驚いちゃったわ。それに……んっ、すごく熱い……火傷しちゃうかも♡」

恍惚とした表情でそれを味わうステンノとエウリュアレ。

その瞬間——二人の足によって強く挟まれた瞬間、肉棒は溜め込んだ精液を一斉に放出した。びゅるっ、びゅるる、と。吐き出された精液は噴水のように吹き上がり、二人の身体をいやらしく汚していく。彼女たちとしてもその量と勢いは想定外だったのか、自分を濡らす白濁の存在に驚いている様子でもあった。

「女神である私を汚すなんて……いけないマスターね。まあ、今日はご奉仕のつもりだし。それくらいは大目に見てあげようかしら？」

「……ご奉仕？」

エウリュアレの奇妙な発言に首をかしげる。

「そ。ご奉仕よ。ほら、私たちって一応サーヴァントでしょう？ マスターに仕えるのがサーヴァントの役目。つまりご奉仕よ、ご奉仕♡」

「……おもちゃにしてるの間違いじゃなくて？」

「あら人聞きの悪い……私たちがそういう事をするサーヴァントに見えるのかしら？」

見える、すぐく見える。

だいたい「ご奉仕」するのに手を縛る必要はないじゃないか。

これ絶対に俺のこと弄って楽しんでるだけでしょう。

「ふふっ、そんな事を言っちゃうお口は……こうよっ♡」

「っ……!!？」

すると、口封じとばかりにエウリュアレが俺の顔に乗っかってきた。

騎乗、つまりは俺の顔の上に腰を下ろしてきたのである。自分の目の前には少女の可愛らしいお尻が。そして、自分の鼻と唇は彼女の最も神秘的な部分と触れ合っていた。

「それじゃあ私は此方をいただこうかしら？ うふふ、先に食べちゃうけど許してね、私」
エウリュアレ

視界の半分が閉ざされたその状況で、亀頭の先端に何かが触れるのが分かった。

そう、それは間違いなくステンノのアレだった。エウリュアレが俺の顔に跨ったように、彼女は俺の腰の上に跨ろうとしている。小さな陰裂で以て亀頭にあてがい、今にも腰を下ろしたそうに身体を震わせている。

「あっ、んん、ますたーのおちんちん……私の入口とキスしちゃってる♡ うふふ、いま膣内に入れてあげますね……私のおまんこに、貴方のおちんぽを……んっ、あっ、あああ
あっ——♡」

ステンノの甘くとろけた嬌声が響き渡る。その瞬間、肉棒を生暖かい肉の触感が包み込んで。

ずりゅ、ぬちゅ、ぢゅぷう。見えなくとも、理解はできる。自分のそれは、いま彼女の膣内に入っていた。少女であり、女神である、その花園。幼い身体と比例して小さな、ステンノの女である部分に。自分の凶悪な愚息が、彼女の聖域を犯していた。

「んんん、んうっ……入っ、てる……♡ マスターのおっきなちんぽ……ああっ、はああっ♡ ご奉仕、しないと……あうん、ああ、ふあっ……やあっ、ンあっ♡」

そうして、ステンノが腰を勢いよく動かし始めた。

少女が腰を持ち上げ・下げ降ろす度に、肉棒が強烈な刺激に襲われる。狭くグチュグチュとして、まるで吸い付いてくるような彼女の膺ヒタは、自分のペニスを美味しそうに頬張っていた。

「くうん、あっ、はあっ……！ マスターのおちんちん、奥叩いてえ……っ、腰、止まらない……ん、はう、んあっあっ、やっ、はああんっ……♡」

「気持ち良さそうね、私^{ステンノ}。んっ……こっちだって、ほらっ……はあ、ああんっ♡」

その一方——享楽に耽る姉妹の姿を目にし、ぐりぐりと俺の顔に陰裂を押し付けてきたエウリュアレ。

分かってる。つまりは、自分も気持ちよくなりたい……あるいは、気持ち良くしなさい、という事だろう。半ば無意識のままに舌を動かす。蜜液の滲み出す少女の雌穴を、……彼女のロリ穴をぐちゃぐちゃと攪拌するように。

「んん、ああっ、やああっ……！ー！ おちんぼ、奥まで来てるう……♡ あっふあっ、マスターの乱暴で……んっ、っ、ふっ、気持ち、良く……だからしない顔に、なっっちゃうわっ……♡」

「ああんっ、はあん……♡ マスターの舌があ……私のおまんこのなかにい……！ はあ、んあ、そこっ、好き……♡ もっとぐりぐり舐め回してえ……！ー！」

狭い室内を二人の卑猥な悲鳴が跋扈する。

腰の辺りではステンノが激しく体を上下に動かし、目の前ではエウリュアレが膣口をこれでもかと押し付けてきて——自分も、不自由ながらも応戦した。腰を下から突き上げ、舌を触手のように稼働させる。とめどなく溢れ出す少女の愛液は非常に甘く、思わず呼吸を忘れてしまうほどの中毒性があった。

「ああん、やあ、んあっはあっ……んん、ひう、はっ、ふああっ……！ おちんぼすごいわ、こんなの初めてっ……♡ おちんぼ好きになっちゃってる、マスターのちんぽに堕ちちゃってる……♡」

「っ……！」

「はあはあっ、わたし女神なのにつ……♡ こんな、虜にされるだなんて……」

普段の姿からは想像できないほどの乱れ具合を見せるステンノ。

もう一息だと確信する。勿論、それは自分と……膣道が小刻みに痙攣し始めたエウリュアレも同様だ。ぐじゅぐじゅと愛撫を続ける舌先は、少女の絶頂に近い事を察知する。

「あっあっ、んあっ、マスターの……んっ、出したいのねっ……♡ 私のおまんこに……びゆるびゆる、びゆるびゆるって、ナカにいっぱい射精したいのでしょう……んんうっ♡」

「はあっあんっ、あん、んあっ……!! 私も、イ……っっちゃう……♡ マスターにおまんこじゅぶじゅぶされへ、あっ、あうん……イク、イっちゃう……♡」

快感に身体を震わせ、甘い声を鳴く二人のロリサーヴァント。

舌と肉棒とが二つの膣を侵入し、少女たちの互いに敏感な箇所を執拗に責め立て、やがてその時は訪れた。ロリ穴が一段と収縮し、ナカのものを強く締め付けた瞬間。エウリュアレとステンノ、二人の口から甲高い悲鳴が叫ばれ、そして――

――どびゅっ、びゅっ、びゆるるるるっ……!!

「ひゃあ、ああんっ……!! なか、なかにっ、マスターの精液、いっぱい出されてるう……!!」

「くう、ううんっ……!! マスターの目の前で、おまんこイってるっ……はああん♡」

絶頂と射精。同時の味わいに溺れるような快楽に襲われた。

我慢の解かれた肉棒からは景気よく精子が吐き出される。きつく閉じ切ったステンノの

膣内、その最奥である子宮内へと。本日二発目の白濁が少女の子供部屋を染めていく。

一方で、顔面には奇妙な放水の感覚があった。俺の口淫によって極みに達したエウリュアレはその雌穴より潮を吹き出して……ぷしゃっ、ぷしゃっ、という音と共に俺の顔を濡らしていった。

「はあっ……はあっ……すごかったわ、マスター……いいわ、私の負け。女神をイカせるなんて、本当にひどいマスターですこと……でも、そんなところが……好きよ」

ずりゆり、と。腰を動かしたステンの膣内から、力なく肉棒が抜け落ちていく。

多量の白濁をその割れ目から零し、疲れたようにしてベッドに寝そべる少女。自分もふう、と溜息を吐いて、射精の余韻に浸っていたところをもう一人の女神に中断された。

「次は私の番よ。休憩なんてさせないんだからっ♡」

身体を起こし、先程までステンのいた場所に移動したエウリュアレ。

まさかとは思うが、まだ続ける気だろうか。自分は既に二発、彼女たちも絶頂に成功し

たはずが、目の前の少女は再戦を要求している。

「なによし、ステンノだけ特別扱いなの？ 私だって貴方と繋がりたいわ」

「っ……っ」

「ほら、見てマスター……私のおまんこ……綺麗でしょう？ 可愛いでしょう？」

そう言うと、エウリュアレは俺の目の前で自らの秘部を開帳してみせた。

割れ目をくばあと開き、桜色の膜のような部分を見せつけ、そこから零れる涎を証拠とばかりに主張する。ステンノ同様に幼いその膣穴は、男を欲しそうにひくひく震えていた。しかし、それとこれとは話が別だ。現実として、二連続の射精は心身ともに力を奪い去っている。弱々しく倒れている肉棒がその証拠とも言えるだろう。

「ふふん、だったら……『女神の視線』♡」

「お、おおっ、おおおっ……!?!」

なんだかすごい事が起きた。

可愛らしく片目を閉じたエウリュアレのウィンクによって、むくむくとそれが起き上がり、やがては元通りのサイズにまで回復したのだ。

マスターに超強力な攻撃。男性特攻。高確率で魅了。うん、つまりはそういう事だ。女神様のウィンクともなればそれくらいの効果があってもおかしくない。

「うふふ……私^{ステンノ}は貴方に堕ちちゃったみたいだけど、私はそうはいかないんだから。もう私なしでは生きられないくらい……貴方のハートも、おちんちんも、骨抜きにしてあげるっ！」

ステンノよりも若干好戦的？ な少女は、再起を果たした肉棒の上へと跨って言った。

亀頭の先端にあてがい、まるで甘噛みするようにして啜え込んだ少女の恥丘。先程のように視界が閉ざされていたわけでもなく、今回はハッキリとしてそれが見える。あと数センチ少女が腰を下ろせば、肉棒は彼女のナカへと侵入を果たすだろう。

「どう？ いたたい？ 女神のおまんこに……貴方のその、熱く滾らせたおちんちん……ハメハメしてみたい？ ふふっ♡」

扇情的な笑みでこちらを誘惑してくるエウリュアレ。

彼女のそれは、要するに「お願いをしろ」と言っているのだ。入れたいのであればそう言え、と。サーヴァントとマスターと言えど、必ずしもその主従関係が一致しているわけではない。いやらしくおねだりをしろ、と少女は言っている。

確かに、その誘惑には抗いがたい魔性のようなものを感じた。ペニスも魅了スキルを受けたように硬直し、辛そうにしている。少なくとも、手を縛られている自分では、お願いでもない限りはそれを鎮められないだろう。

だから――

「ふふふ、よく出来ました♡ それじゃあご褒美に挿入させてあげるわね。ごめんあそばせ」

ある種の敗北宣言のようにそれを告げる。

するとエウリュアレは満足がいったように微笑んだ。

彼女はゆっくりと腰を下ろしていき……亀頭が陰裂をかき分け、その奥にある狭く小さな穴へと沈んでいき……少し足でも滑らせたのだろう、ゆっくりと下降していたその動きが突如として加速した。

「っ——！！??? くう、んん、はあんんんっ………♡」

勢いよく肉棒の全てを咥え込んだその瞬間、少女は身体を弓なりに逸らして咆哮した。

(なに、これえ……!?!? 舌と全然ちがう……おつきくて、かたくて……ステンノってば、こんなのを入ってたの……? ちょっとまづいかも……♡)

声を押し殺し、必死に持ち堪えようとするエウリュアレ。

思わず「大丈夫?」と声を掛けた。本来ゆっくりと入れるところを、足を滑らせ、一気に挿入してしまったのだ。流石の彼女も、これには虚を突かれたのだろう。

「ふっんんう……ぜ、ぜんぜん、らいじょうぶよ……♡ これくらい、余裕っていうか……ほら、っ、んっ……今から動いてあげるから、貴方は気持ち良くなってだけいなさいっ……んっはっ、んあっ……あっんやっ、ふうんっ、んん、はっ、ああっっ……!!」

少女の可愛らしくとろけた嬌声がこだまする。

呂律も回らぬ不安定な様子のまま、エウリュアレは息荒くも腰を上下に振り始めた。

「ふあっ、あっ、ひああっ……♡ んう、あうんんっ、はっんあ……腰、勝手に動いちゃ……やっあんっ……!! ましゅたーのおちんちん、気持ち良すぎてっ……こっちが、墮ちちゃうう……ひあ、んああっ……あんっ、あっ、っ、くうんんっ……♡」

自分の腰の上で、激しく体を震わせる少女。

その口からは快楽に染まりきった嬌声と吐息とが絶え間なく零れていた。

身体をのけ反らし、エウリュアレは懸命に腰を振り続ける。その表情にいつもの余裕……男を誑かす妖艶な気配は感じられない。頬を赤らめ涙ぐむ弱々しい顔は、明らかに限界が

見えていた。

「んっ、ふうあっ……はあ、ああんっ……！ やあんっ……マスターの、いじわるっ……このなの、卑怯よっ……んんっ、女神の私を、こんな気持ちよくさせるだなんて……ひううっ♡」

自分としては何もしていないのだが……エウリュアレの乱れた姿は、これはこれで新鮮だった。

外見も、性格も、あるいは心でさえ。完成された女神である彼女は、姉妹であるステンノともあらゆる面で似通っている。そのはずが——体質に僅かな違いがあったのかも知れない。こうまで感じやすい身体をしていたとは、流石に驚きだ。

「そこ、らめえっ……コンコンしたら、おまんこ壊れちゃ……っ、あっ、あんっ♡ はああ、ああっ、んんっ……んにやつ、あう、ん、ふあっ、ああっ、ああんっ……！」

あの様子では、達するのにそう時間はいらなだろう。

じゅぼじゅぼと抽挿が繰り返される互いの結合部を眺め、漠然とそう考える。それでもまだ幾らかの猶予があったわけだが、少女にとってそれは完全に想定外だったわけで、

「ふにゃっ……!!? ス、ステンノってば……急に何を……ひううんっ♡」

「……ふふ、エウリュアレ私 ったらとても素敵な顔をしているわ。もっともっと気持ち良くなりた
いでしょう? ふふふ……私も協力してあげる♡」

エウリュアレを襲ったのは、気配もなく参戦してきたもう一人ステンノによる愛撫だった。
腰を上下させる少女に対し、背後からの強襲。後ろから羽交い絞めするように手を回し、
エウリュアレの胸に浮かぶ小さな桜色の突起をステンノは摘まみ上げたのだ。

「やっ♡ あっ♡ それ、ダメっ♡ おっぱい、敏感だからあ……♡」

コリコリと、ステンノは指の腹でそれを何度も愛撫する。

可愛らしく勃起した乳首を遊ばれるだけで、エウリュアレの様子が一気に危うくなって

いくのが分かった。膣内も痙攣し、更に強く締め付ける。指で引っ張るようにすると、甲高い悲鳴が叫ばれた。

「んやあ、そこ、はあ……っ、はうんんっ、あっ、ああっ……！」

「乳首も、クリトリスも……こーんなに硬くなってる……♡ うふ……可愛い♡」

「んあっ、ステンノの……ばかあ♡ マスターのおちんぼだけでも、限界なのに……あく♡」

右手は乳首を、左手は陰核を。今なを腰を振り続けているエウリュアレを絶頂へと急がせるかのように、ステンノは背後からの愛撫に徹していた。

どちらの突起も硬く起立している。それは少女のとうけきった表情を見れば当然の事だった。敏感に張りつめたそこを弄られた事で、少女の限界は更に加速する。肉棒を締め付ける膣の感触は、あまりに強く俺を喜ばせた。

「イクのね、エウリュアレ私。マスターのおちんちんに、服従しちゃうのね」

姉妹の変調を、ステンはいち早く察知する。

「イク♡ イっちゃう♡ 女神おまんこ、マスターのおちんぽに敗北しちゃう……♡ いま膣内出しされたら、絶対……女神なのにマスターの女にされちゃうわ♡」

エウリュアレ自身、己の限界は分かっているようだった。

高貴な姿を消した、卑猥にすぎるイキ顔。ただただ快楽を貪るその姿は、女神ではなく雌と呼ぶべきかもしれない。主従を逆転……いや、これが本来のカタチか。女神である少女が屈服するべき瞬間は、まさに目前に現れていた。

「いいわっ、出しなさいっ……♡ 好きなだけ、出していいからっ……あっ、あんっ……だからもっと、いっぱい愛しなさいっ……！ 愛して愛して……貴方のサーヴァントにしてえ……！」

そんな事を言われては、我慢する方がおかしかった。

ビクビクと痙攣する少女のロリ腔に応えて、自分のそれも子種を吐き出す準備を整える。狙うべきは一瞬だ。少女の子宮が一番深く下がってきた瞬間。彼女の子宮口を貫いた、その刹那だ。

そして――

「んっあああああっつ――……………！！　出てる、マスターの精子……………私の子宮に、いっばい……………♡　あっんあっ、んっ、んんっ、イクっ……………イっちゃうっ……………マスターの腔内出し、あっあっ、はあっ、イク、イクイクっ、イックウウウっ……………！！」

びゆる、びゆるるっ。今日一番の勢いで吐き出された子種が、少女の子宮、その内部へと盛大に注ぎ込まれた。

子宮への射精にエウリュアレの身体がビクンビクンと震える。自分も同じだ。最後の一滴を出し終えるまで、自分と彼女は一番深いところで繋がっていた。

「好き……………マスター♡　わたしの心、もう貴方に堕ちちゃったあ……………♡」

くたつと俺の身体に倒れ込んできたエウリュアレ。
その頭を優しく撫でてやりたかったが、生憎、いまだ両手は縛られたままだった。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「あー楽しかった♡ うふふ、あはは！ 最高の気分！ 今なら何でもできちゃいそう！」

その後、エウリュアレは鼻歌を奏でるほどにご機嫌な様子を見せていた。

俺はと言うと、手錠を外してもらい、ようやく解放された心地にホッと安堵の溜息を吐きこぼす。だがまあ、許可をしたのは自分なので安堵というのも変な話だが。

「マスターを手錠で縛り、動けないところを襲う……だけどマスターのちんぽの前に女神二人が快樂墮ち……うん、ひどい脚本だ」

「えー、私はけっこう気に入ってたのだけれど……そう思うでしょ、私^{ステレン}？」

「ええ。女神である私たちが貴方に堕とされるだなんて……非現実なところに魅力を感じるわ」

と、いう事だ。

早い話が、俺は彼女たちの遊興ひまつがしに付き合っていたのである。もちろん拘束される事も了承済みだ。趣向を凝らした結果、そうなったというだけの話である。

それにしても、その辺りについてはどう思う？

「なによ。もしかして、私たちが本当に堕とされたと思ってるわけ？」

「うふふ……面白い冗談ね、私エウリュピヤ。メロメロなのはマスターの方ではなくて？」

むう、はぐらかされてしまったか。

まあいい。俺も楽しんでたのだし、お互い様だ。

「さて、次はどんなシチュエーションにしようかしら？ 令呪で強制的に従わせられる感じ？ マスターの肉奴隷にされるのはどう？」

「そうね……その辺りは、マスターに決めてもらいましょう。よろしいかしら、マスター？」

ステンノが視線を送ってくる。

何ともまあ、恥ずかしい仕事を押し付けられたものだ。しかし、いつか……芝居ではなく、本気で二人に愛してもらいたいものである。まあ、女神を攻略するなんて相当難しいだろうが。

（ふふふ……実はもう墮ちちゃってる……なーんて、絶対に言ってあげないけど）

（これからもよろしくね。……好きよ、私のご主人様♡）

……難しい、と思う。

霊基No.10 メドゥーサ



PROFILE

身長：134cm 体重：30kg

呪いに掛かるより以前の姿で現界した少女。
体は遥かに幼い。それが重要。

魔力供給回数：88回

絶頂回数：135回

好きな体位：後背位

処女喪失日：召喚から246日目

妊娠確率：46% 【安全日】

姉様たちより先に妊娠するわけにはいかないと思っている。
万が一デキてしまった場合は速攻報告に行くつもり。

STATUS

絆LV 100  Next 0

性欲：D ★★☆☆☆ 知力：C ★★☆☆☆

体力：D ★★☆☆☆ 母性：D ★★☆☆☆

従順：A+ ★★★★★ 反抗：E ★☆☆☆☆

淫乱：D ★★☆☆☆ 感度：B ★★★★★

「ありがとうございます、この姿のまま愛してくれて……。
この体でも精一杯お奉仕させていただきますね♡」

霊基No.10 メドゥーサ

SECRET GARDEN EX



SG1：成長恐怖症

未来の姿、本来の自分への成長に恐れを抱いている。
できることなら色々物足りないこの体のまま愛してほしい。

SG2：人間不信

嫌いというわけではなく、とある事情から人間を苦手としている。
彼女の心を開くのは容易ではないが、
打ちとければ素顔の彼女が見られるはず。

SG3：奉仕精神

生来の気質か、あるいは姉たちの教育の賜物か。能力が落ちた今、
彼女は戦闘以外の面での献身が必要と考える。純真な彼女は姉の冗談を
間に受け「マスターの肉奴隷となりなさい」を実行しようとしていた。

WEAK POINT

face : ★★☆☆☆

寡黙で引っ込み思案。顔を見られるのが苦手。
なのでいつもローブを被っているのだが、
お願いしたら恥ずかしがりながらも
脱いでくれる。

bust : ★★★★★☆

成長した自分と比べて、随分と物足りない
ことを気にしている。それでもマスターが
望めば、その足りない胸を寄せて
ちっばいズリをしてくれる。

vagina : ★★★★★★

子宮をコンコンとリズム良く
叩かれるのが好き。
マスターに愛されている感じがするから。

LIVE



状態：♥♥♥

姉と同じ神性を宿した
ことで、多少なりとも
抵抗力が発生している。
それでもたくさん中に
出してもらった後は、
やはり期待をしてしまう。

「ふう、今日はいつても以上に疲れたなあ。一日中、戦闘シミュレーションだったし、流石にもうクタクタだよ……」

カルデア唯一のマスターである自分の日々は忙しい。それでも今日は特に忙しく、身体を休めたのも夜遅くとなってからだだった。

とはいっても、ただベッドに入って就寝……というのもどこか寂しく、思い立つと同時に自分が職員共用の大浴場へ向かっていた。

カルデアに置かれたこの空間は、専ら公共のモノとして多くの職員・サーヴァントに利用されている。自分もまたその一人で、特に疲れた日は、マイルームの簡素なユニットバスではなく此処を利用する事も珍しくない。

「流石にこんな時間には誰も入ってないか……まあ、それはそれでゆっくりできる……」

服を脱ぎ、タオルを一丁、誰もいない浴場に躍り出る。

小綺麗とした内装の空間は、自分一人だけだというのに眩いくらいの明かりに照らされていた。少なくとも、用意された洗い場は二十を超えている。これだけの広さともなれば、

自分一人で独占するには些か寂しくもあるだろう。

疲れた身体を揺らめかし、手近な風呂椅子に腰かける。何にせよ、湯舟に浸かるのは身体を綺麗に洗ってからだ。戦闘訓練（タックニック）とはいえ汗は掻いているのだし、まずは背中から洗おうとボディソープを取り出して――

「後ろは私に任せてください。マスターの手が届きにくい部分は、私が綺麗にしてあげます」

「ああうん、それじゃあ任せるよ。ありがとね、メドゥ――」

だが、その瞬間。無視してはいけない事を無視したような、猛烈な違和感に襲われた。前提として話しておこう。公共の浴場と言っても、当然男女で分けられている。自分の居る場所は間違いなく男湯だ。だったら、なぜ――どうして女の子が此処にいるのだろう。

「ッ――メドゥーサ……!?　なんでッ……ここ、男湯なんだけど――!?」

「？　それが……どうか、しましたか？」

違和感の正体。それは、自分の後ろにいる少女が原因だった。

ランサーのサーヴァント。真名を、メドゥーサ。かのゴルゴン三姉妹の末妹であり、つまりはステノ・エウリュアレと姉妹関係にある槍使いの英霊……そんな彼女が、どういうわけか自分の背後にいた。しかも全裸で。いや風呂場である事を考慮したら自然な恰好ではあるけれど。

少女は——メドゥーサは、きょとんとした様子でこちらを見つめている。

振り向いた先、どうしても彼女の幼い身体つきが目に入ってしまった。思考が混乱するところを何とか抑えて冷静に考えてみるが……うむ、やはり意味が分からない。

「迷惑……でしたか？　もしそうなら、私……」

「いや、そのっ……迷惑じゃない。迷惑じゃない、けれど……」

少し落ち込んだように悲し気な表情を見せるメドゥーサ。

迷惑ではないが、困惑はしている。それに驚きもした。前にも忍び歩きは得意だと自称していたが、だからって気配もなく現れる事も無いだろう。アサシンも顔負けの気配遮断能力である。

もちろん、ここは混浴ではないので、男女が共にいるこの状況が非常にマズい事くらい自分にも分かっている。少女の側に出ていく気が無いとすれば、そこは自分が出ていくべきかもしれないのだが――

「それじゃあ始めますね？ 痛かったら言うてください」

「あ、うん……」

「ごしごし、ごしごし……気持ち良いですか、マスター？」

「はい……すごく、上手……だと思えます……」

結果として、上回ったのは、少女の有無を言わせぬ圧力の方だった。

ワケも分からぬままにそれは開始される。止める事も、逃げ出す事もできず、メドゥーサの小さく優しい気な手つきが、自分の背中を何度も撫でまわす。

タオルのザラザラとした触感が肌を擦り、背中が気持ち良く泡立っていくのを理解した。ごしごし、ごしごし、と。丁寧、丁寧。何を思っているのかは分からぬが、やる気に満ちているのは伝わってくる。とても気持ちが良いので、その事に不満なぞあるわけではないが……それでもやはり不自然だ。気になって、彼女の使命感めいたやる気の正体を訊いてみる。

「……今日の戦闘訓練、私……あまり成果を出せませんでした。未熟なのは分かっています。が、それでも不甲斐ないです。なので、その……マスターのお役に立ちたくて……」

(……なるほど、そういう事だったか……)

落ち込んで語る彼女の様子を見て、不自然な行動の理由、その背景にある事情を理解した。

確かに、今日のシミュレーション……メドゥーサの調子だが、良かったとは言にくい。

しかし、誰にでも不調な日は存在するのだし、気負いすぎる必要も無いと自分は思う。

「……いえ、そういうわけにもいきません。私は……幼い姿で召喚されました。それに合わせて能力も酷く劣っているはずです。成長前の姿……怪物から遠ざかった私は、とても非力な存在にすぎませんので……マスターに、とても迷惑を……」

「……………」

絶えずその手は奉仕を続けながら、少女は深く沈んだ声でそう語る。

つまりはこれも、彼女が感じた無力感ゆえの行動だった。

幼い姿で現界するサーヴァント。怪物性を失い、非力な女神の一柱として召喚された少女。姉たちとは違い、戦う力を有しているとはいえ、その力は『本来の自分』とは大きくかけ離れたものだ。それを「無力」とメドゥーサが感じてしまうのも無理のない事である。

「私、マスターのお力になりたいです……だから、貴方が望むのなら、私——あ痛っ!？」

望むのなら、と。そう言葉に出した少女の額を、軽く指で弾いてやった。

メドゥーサは驚いたように瞳を丸くする。その先の台詞は聞かずとも分かっていた。大方、俺の意思によつては「今の姿」を捨て去る覚悟がある……という旨を伝えようとでもしていたのだろう。彼女にとって、成長とはすなわち力となる。それがマスターの命令であるならば、たとえ自分の感情がどうであれ従うという……ああ、なんて馬鹿らしい。

「メドゥーサは今の姿が気に入っているんだろ？ ステンノやエウリュアレと同じ姿でいる事が……」

「は、はい……成長前の姿でいられる事はとても嬉しいです。この姿でいられた時間は、その、あまり長くなかったので……」

だったら、と続けて。

「お前は今のままでいるべきだと思うよ。それほど貴重だった時間なんだ。せっかくカルデアには二人もいるんだし……誰の命令でもない、お前はもっと自分の願いに従うべきだ」

「……………!!」

自分の思った通りの気持ちで少女に伝えてあげる。それと同時に、姉たちと同じ綺麗で鮮やかなその紫髪を梳かすようにして頭を撫でた。

メドゥーサは困ったように視線を泳がせる。

マスターの力になりたいという気持ちはとても嬉しいし、戦力的な事を考えるときっとそれは正しい判断なのだろう。だからって無理をする必要はどこにも無い。今の姿を捨て去る事も、こうして身体を張る事も、変に気を遣う必要は微塵も無いのだ。

「自分の、願いに……」

俺の伝えた言葉を、少女は嘔みしめるように反芻して。

「……………ありがとうございます、マスター。この姿の私を、このままでいさせて……たとえこの身体は非力でも、それでも精一杯あなたのお力になってみせます……………!!」

歓喜に涙ぐむような、けれども、強い覚悟を滲ませるように。

メドゥーサが声を震わせて抱き着いてくる。喜んでくれて何よりだ、が……しかし……向き合った状態で抱き着かれては、その……色々とマズい問題がある。

それに、今の彼女は何一枚として肌を守る事のしない真正銘の全裸はだかなのだ。自然、俺の男としての部分が反応してしまうわけ——。

「あの……マスター、これ……」

「あ、ごめんっ……！ 偉そうなこと言っておいて、こんなにしてるだなんて……！」

メドゥーサの視線が俺の下半身の方へと向けられる。

そこには彼女の裸体を見た事によって興奮した、赤黒く充血する男のイチモツが存在した。硬く怒張したそれは、少女の目の前だというのに悪びれる事もなく存在を主張する。堂々たる佇まいによって、少女の網膜に雄のカタチを焼き付けていた。

「すまん、すぐに出ていくから……!!」

「ま、待ってください……!!」

唐突に、その場を急いで立ち去ろうとした自分の腕を、少女が力強く掴んでくる。視線を左右に泳がせて。もじもじと身体をくねらせて。

そう言った。確かにそう聞いた。ほんのりと赤らめたその表情を向けて、決心を踏む強い眼差しで彼女は告げる。それは甘美で淫靡な、夜の時間への誘いだった。

「……私は構いません。マスターの……性処理も、私たちサーバントに与えられた使命です。きっと、お役に立ってみせますから……」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

風呂椅子に座っている自分の足元で、少女は嬉しそうな笑みを作っていた。

「これが……マスターの、おちんちん、なんですか……大きくて、不思議な形……つまりこれって、私に興奮してくださったから大きく……したんですよね？ えへへ、嬉しいです……」

凶悪な威容を放つ肉棒を前にして、メドゥーサはなんら怯える事なくそう語る。まじまじと見つめては、驚きを露わにし、初めて目にしたのだからう勃起した陰茎に興味が尽きぬ様子だった。

無論、彼女の言う通り……興奮の原因は、少女の幼い肢体や局部を目にした事による影響と見て間違いはない。姉たち同様、身長にして130CM台の小柄なサーヴァントの肉付きは、成長と成熟の途上にある絶妙な様相を呈していた。

「あの、私の事は気にしないでください。サーヴァントとして、マスターのお役に立つ……使命感は勿論あります。ですが、これはその……私がしたくてやっている事なので」

そこまで言われてしまえば、これ以上、自分がとやかく言っても野暮でしかないだろう。命令でもなく、使命でもなく、メドゥーサはそれを自らの意思で決めたと告げる。つま

りは告白だ。好きでもない者に対し、そうまで自分を捧げる事もあり得まい。

「では、始めますね？ んっ……こうやって、手で擦ってあげると……」

「っっ……っ！」

そう言って、彼女の愛らしい掌が包み込むようにして肉棒と触れ合った。

自身の敏感な箇所を触られた事によりピリッとした衝撃が全身を疾駆する。メドゥーサは右手を筒のように丸め、それを以てしゅこしゅこ……勃起を続けるペニスに対し、愛撫を開始した。

「マスターのおちんちん……こうすると、まるでゴシゴシ洗ってるみたいですね。気持ち良い、ですか……？ 私、こういうのは初めてなので……上手くないかもしれませんが……」

自信無さげに訊いてくるメドゥーサ。だが、心配はいらない。少女の手は初めてと思えないほど絶妙に自分の弱い部分を突いてくる。それに、何と言っても視界に映る光景が破

壊的だった。

「いっしょっ、いっしょっ……♡」

懸命に奉仕を続けるメドゥーサの、首から下へと視線を向ける。

身に纏うべき衣服の全てを脱ぎ去った白日の姿。色白い肌の上に浮かぶ二つの桜色と、更に下方の幼き割れ目。その全てが隠される事なく自分の目の前に差し出されている。浮かび上がった鎖骨、健康的なくびれ、そのどれもが俺を映像としても楽しませていた。

「そんなにじろじろ見られると……その、少し恥ずかしいです。肉体も成長前ですし、あまり自信がありません……」

俺の視線を察したのか、メドゥーサは左手で胸を隠し。

「私のおっぱい、まだ小さいです……きつと幻滅させます」

そんな事はないと言いたかったのだが、すっかり自信を喪失してしまった少女は頑としてそれを晒すことをしない。成長前の、僅かではかない少女の膨らみ……メドゥーサのそれは色も良く、思わず触れたくなくなってしまふほどの魅力が詰まっていただけに、実に惜しい。

「？ 胸……で、するんですか？ マスターのおちんちんを……私の胸で……奉仕……」

なので、彼女に自信を付けてもらいう意味も兼ねてそれを提案した。

メドゥーサは少し考え込んだ様子を見せてくる。それは恥ずかしいとか感情的な躊躇いではなく、その行為に何の意味があるのかと疑問を浮かべている様子に思われた。

「いきますね？ んしょ……ん、あっ……これっ、なんだか変な感じ……♡ マスターのおちんちんが胸に擦れて、んあ、はっ……私まで、おかしくっ……あうんっ♡」

俺の提案通りに、胸での奉仕を始めたメドゥーサ。

一言で表せば、それはパイズリだ。両の乳房で以て肉棒を挟み、上下する事によって愛撫する……という、ある種、大きな胸の持ち主にしか成しえぬ技だった。

しかし、少女の膨らみはお世辞にも巨乳であるとは言い難い。言い難い、のだが――
メドゥーサは両手で己の胸を精一杯寄せ上げ、挟むとはいかずとも摘まむようにして肉棒をその胸元に啞え込む。そのままズリズリと……身体全体を上下する事によって彼女ならではのパイズリを実行した。

「はあ……ああっ……これ、おちんちんの先っぽが私の弱いところに当たって……くひゃう♡
マスターを気持ちよくしないとイケないのに、私まで気持ち良くなってしまいますっ……
♡」

胸を押し付け、懸命に奉仕……その光景は実に淫靡だ。行いのいやらしさと、幼い身体で健気に頑張る姿のギャップがひどくたまらない。それにメドゥーサ自身も亀頭に乳首を刺激された事によって、快感を覚えている様子だった。

「小さいおっぱいでも……こんな使い方があるんですね……♡ んん、はあっ……マス、
ター……どうですか、私のおっぱい……ちゃんと気持ち良くできてますか……？」

その問いかけには勿論だと即答した。

程よい柔らかさに刺激され、肉棒はびくびく嬉しそうに震えている。少女の幼い手で扱かれ、小さな胸にも扱かれたとあっては、気持ち良くなならないわけがなかった。

「不思議な感覚です……ん、んっ……気持ち良いのが止まりませんっ……♡ あっ、マスターのおちんちんがピクン、って……痛かった、ですか……？ もう少し、優しくした方が……」

思わず腰が跳ね上がり、その衝撃にメドゥーサが心配そうに見つめてきた。

彼女はそれを「自分が痛くしてしまった」と考えたようだが、そうではない。寧ろその逆だ。彼女の忠実なまでの奉仕が、俺の限界を早めてしまったのだ。

「出そう、なんですね……おちんちんの先っぽから、精液を……んっ、ふうっ……びゆるびゆるって、気持ち良くなったから……はあ、んんっ……だったら、その——」

自分の正直な状態を教えると、少女は必死な様子で見上げてきた。

その胸は絶えず俺の肉棒に押し付けられ、正真正銘の奉仕サービスを続けるメドゥーサはそれの「ある事」が気になったらしい。このままいけば、数十秒としない内に陰茎は大量の精液を放出するだろう。故に……果たして、その行き場をどうするのか、と。

「お風呂場を汚すわけにはいきませんっ……なので、私のおくひのなひゃに……♡」

「っ……ああ、頼む……!」

そう言うと、肉棒を少女の胸から抜き取り、今度は彼女の口の中へと照準を向けた。

ああん、と大きく口を開いて、メドゥーサが誘惑してくる。赤くぬらつくその中には白い歯たちが綺麗に整列し、まるで男のイチモツを待ちわびているようにも見えた。

もちろん、浴場を汚してしまうなんてのは一つの口実だ。本音ではあるが、真実ではない。自分は少女の口内に吐き出したく、少女は自分のそれを飲み干したいと告げていた。

「んっ……ふう、んん……!　じゆる、うんっ……ずじゆ、じゆぼっ、ぢゆるるるっ……
んむ、んうっ……じゅぷっぢゅぷ……ふあひ、ふあひていいれすよ……♡」

躊躇う事なく少女の喉奥に肉棒を挿入する。フェラチオ——ではあるが、もう刺激を与える必要など無いほどに自分のそれは極まっていた。

それでもメドゥーサは健気に、懸命に、少女には大きすぎる程のイチモツを口内全体で啜っては、頭を前後に運動させる。風呂場を汚してはならないという名目のもと、およそ数秒後に吐き出されるだろうそれを一切零すまいとして。

ただただ喉奥を行使する。初めてにしては積極的過ぎる程の吸い付きが俺を刺激する。たまたま、俺も腰のストロークを始めるが、それでも少女は吸い付いてくる。

「んじゆる、ちゆる、じゅぽっぢゅぶんっ……♡ んんっ、んむう、ぢゆるる、ずじゅううう、んっ……！ ぢゅぽ！ じゅっ！ ぬちゅ！ じゅぶっ！」

少女の口淫が一層激しくなり、いよいよ以て限界が近づいてきた。

これ以上動けば射精する。もはや爆発は数秒前だ。

逃がさないよう、メドゥーサは思い切り吸引し、自分もまた彼女の頭を逃がすまいとして掴み抑えた。あまりに巨大で強烈な男の感触、臭い、味わいに、少女は目を白黒させて

苦しがる。それでも亀頭を彼女の口内の奥深くへと潜り込ませ、腰が碎けるほどの衝撃に襲われた瞬間——

——びゆるっ！　びゅっ！　びゅうっ！　びゆるるるっ……………！！

「くう、っ……………！！」

「んふうううっ……………！！　んっ、ぢゆる……………っ、んくっ……………ごくっ……………ん、んっ……………ごく
んっ♡」

メドゥーサの白い喉が幾度となく動きを見せる。

かくして、吐き出された精液は少女の口内で勢いよく射出され……………逃げ場なく注ぎ込まれたそれを、メドゥーサは必死に飲み干していた。

——びゅっ！　びゆる！　びゅううっ……………！！

「んっ♡ んふう♡ んっ、んむう♡ ……ごっくっ♡」

何度も軽快に精液を放出する肉棒。メドゥーサは苦しそうに目を閉じ、射精が終わるまでの間、その喉をひたすらに働かせていた。

彼女の方から提案された事とはいえ、流石に申し訳なく思う。本来であれば胸元や、全身、あるいは周囲を汚すに留まっただろう精液を、あろう事に彼女の喉で吐き出すよう仕向けてしまったのだ。

それはさながら、彼女の喉を排泄に使用しているが如き罪悪感だった。苦しい思いをさせてしまった事を謝ると、メドゥーサは肉棒を口から引き抜き、恍惚とした様子でこちらを見上げ、

「構いません…：サーヴァントですし、これくらいはへっちゃらです。それに…：」

「…：それに？」

少女は喉を鳴らす。

「私、マスターの事が大好きです……何をされても……きつと、嬉しく思うはずです」

「……………!!」

その告白は、正面から受け止めるには破壊力がありすぎた。

普段はクールというか、あまり表情を変えることのしないメドゥーサ。だが、その時の彼女の笑顔は外見相応の少女と言っても偽りない、可憐で清楚な形を描いていた。

「っ……………メドゥーサ!」

「きゃっ♡ マスター、そんな急にっ……………!」

気が付くと、自分は少女の身体を抱きしめていた。

押し寄せた衝撃は自分の奥底に封じていた欲望を呼び覚まし、射精直後だというのに更なる悦楽を求め出す。耳元で囁きを告げると、メドゥーサもまたぎゅっとなんを抱きしめて、

「はい……私も、マスターと繋がりたいです。この姿のまま、貴方に愛してほしいです……」
♡

その言葉を合図に——立ち上がり、そして、場所を変えた。

移動した先、お湯で満たされたその一画。俺もメドゥーサも膝上まで侵入し、メドゥーサに関して言えば、浴槽を取り囲む石造りの外枠に両手を付くかたちで入っていた。自分はその後ろ、獣の姿勢で手を付く少女のちょうど背後に立っている。

「こうで……よろしいでしょうか？ う、くっ……マスターに、私のエッチなところが全部見られています……この格好は、少し……いえ、すごく恥ずかしいですね……」

俺にお尻を突き出すようにしているメドゥーサ。

当然、彼女の秘所——蜜液を垂らす陰裂や、きゅっと閉じられた菊門が丸見えとなっている。それでも隠すことはせず、寧ろお尻を左右に揺らめかし、誘惑するかの如き素振りを見せていた。

「マスター、来てください……♡ もう我慢できません。貴方のおちんちんを、私の……」

「私の……?」

意地悪ぽく聞き返す。すると、少女は手を後ろに広げて見せて。

「っ……お、おまんこです……♡ 私のちっちゃな子供おまんこに、マスターのおちんちんをくださいっ……! んっ、ふう……あっ、おちんちん……先っぽが、ちゅってしてえ……♡」

よく出来ましたと言わんばかりに、彼女の欲し求めていた肉棒、その先端に当たる亀頭を少女の膣口に押し当てた。

途端、パクパクと震えるメドゥーサのロリ穴が面白いように吸い付いてくる。おねだりでもしているのだろうか。だとすると、これ以上の焦らしは苦になるだろう。

「それじゃあ、挿れるよ。力、抜いて……！」

「はいっ……！ん、くっ……マスターのおちんちん、私のナカにっ……あっ、ああっ……おまんこ、掻き分けへっ……あっ、んあ、ああああ……っっ！！」

その瞬間。腰を少しずつ突き出し、亀頭が少女の内部へゆっくりと潜り込んでいき。このまま一気にと決め込むと、肉棒は彼女の雌穴を勢いよく穿通した。

「あっくあ、ふあっ、あああっ……♡入って、ますっ……マスターのおっきなおちんちんが、私のちっちゃいおまんこ広げて……あっ、んああっ——！！」

膣内を埋め尽くす男の感触に、メドゥーサが身体をガクガクと震わせて咆哮する。

最初の一突きで既に限界寸前の様子……本来の姿ならばいざ知らず、幼い姿で現界する少女には流石に大きすぎたのかもしれない。痙攣する彼女の様子は、いつになく弱々しい。

「らい、じょうぶです……少し驚いただけで……マスターのこと、ちゃんと受け止めてみせ

ますから……あう、んっ、これっ……やつ、ああっ……気持ち良いところ、擦れて……♡」

だが、それでもメドゥーサは体勢を立て直す。

肉棒の突き刺さったお尻を持ち上げ、どうぞと言わんばかりに差し向けてくる。

ならば……こちらも、これ以上の気遣いは彼女の覚悟への無礼となるだろう。少女がかくも勇気を振り絞って言葉を紡いだのだ。それに応えてあげるのが男としての……マスターとしての責務だろう。だから――

「行くぞ、メドゥーサ……！」

「あっ、やあっ……おちんちん、動き出してっ……んあっ、はあううんっ、あっ、ああっ……♡」

腰のストロークを開始し、少女の膣内を乱暴にかき乱す。

自分たちの他には誰もいない、開豁とした浴場を鳴り響く淫靡な音。パンパンと腰を打ち付け、愛液が弾け飛ぶ。真下にお湯が張られている事もあって、激しく動くとお湯が

バシャバシャと波を打っていた。

「あっ♡ はっいやっ♡ これっ、んっ……こんなの、しら、ないっ……♡ おまんこっ……
膣の、ナカが……はひっ、ああっふああ、これ……気持ち、いいっ……♡」

肉棒が膣道を行き来するたびに、少女の口から甘い悲鳴が零れだす。

背後から突き入れるこの体勢は、一方的に襲うかの如き征服感に満ちていた。外見だけで言えば小学生程度のロリサーヴァントを、後ろから一方的に……罪深い事だとは知りつつも、腰は依然として止まらなかつた。寧ろ余計に加速した節さえ存在する。

「ひああっ、あうん、ふうあっ……あっ、マス、ターっ……♡ 私、嬉しいですっ……ます
たーが、こんなに私の事を求めてくれてっ……あっんあ、今、すごく幸せで……んああっ
♡」

「このくらいで満足してちゃダメだよ、メドゥーサ……もっともっと幸せにしてあげるか
ら……!」

「あつ、はあんっ、うれひっ……嬉しい、ですっ……♡ もっとコンコンしてくださいひゃいっ、おまんこの奥、おちんちんの先っぽでコンコンって……♡ あっ♡ あっ……♡」

恍惚とした声で鳴くメドゥーサ。

苦しくはあるのだろうが、それ以上に幸せといった様子だ。少女のロリ穴も気持ち良さそうに痙攣を繰り返す。こんなに乱れた姿のメドゥーサを見た事が無かったので、どこか新鮮な気持ちに包まれた。

「来て、るっ……♡ マスターのおちんちん、子宮に、ちゅっ……って、キス、してっ……♡ 好きですっ、これしゅごい好きですっ……♡ 私まだ子供なのに、こんなにエッチになっ तरीゅっ……♡ ひあつ、はあんんっ……♡ マスター、マスター♡」

自分が自分でない感じ……それがメドゥーサの内にある気持ちだろうか。

果てしなく快楽を求め、性に乱れる……確かに、それは普段の彼女からは想像できない一面だ。魅力的である事に変わりはない。だが、その様子を恥ずかしく思ったのか――

「ん、んうっ……はあ、んあっ……んっ、くうんっ……んむ、ううっ……んっ、ふっ……♡」

明らかに声を押し殺そうとしている。嬌声の一つとして漏らさぬよう、メドゥーサが必死に歯を食いしばり耐えていた。

やはり、乱れに乱れたあの姿は、彼女の本意とする所ではないのだろう。それはそれで可愛らしいのだが、隠されてしまうと暴きたくなるのが人の性分である。涙ぐむほどに耐えているところ申し訳ないのだが、メドゥーサには本当の自分というものを知らずとしよう。

「んやあ……っ、マスター、この体勢はあ……ひゃあんっ♡」

途端、押し殺していたはずの喘ぎが漏れる。

メドゥーサが戸惑うのも無理はない。いわゆる立位の体勢……バックで繋がっていたのを、そのまま持ち上げるようにして……少女の身体は、俺の両腕によって支えられていた。

「ああん、はあっ……♡ ダメです、ましゆたあ……っ、こんな格好、恥ずかしいです……♡ 前の鏡に、恥ずかしいところ全部映っちゃってますっ……♡」

俺に抱きかかえられ、下から突かれる姿勢の少女。小柄ゆえに可能となるこの体勢によって起きた、彼女にとつての不運——

自分たちの目前にあるのは、壁に取り付けられた一枚の巨大な鏡だ。それと向き合うカタチで自分たちは繋がっている。つまり……少女のトロけきった表情も、小振りな双丘、更には肉棒を啜え込む秘所までが、その鏡一枚に映し出されていたのだった。

「ひあぁっ、あうん、んんっ、ひいうんっ……♡ はあ、んあ……マスターのおちんちん、入っちゃってるっ、私のちっちゃいおまんこ、ズボズボしてるっ……♡ んやあ、見ないで……ください……！ 私のエッチなカタチ、見ちゃらめです……！」

表情を手で隠し、激しい羞恥に苦しむメドゥーサ。

喘ぐ自分の姿をこうして見つめるのは、涙ぐむほどに苦しいものがあつたのだろう。だからこそ俺は解せない。メドゥーサはそんな自分の姿を恥として捉えているようだが、恥

ずかしがる必要が果たして何処にあるというのか。

「あっ、んあっ、マス、ター……♡ 今、なんてっ……♡」

「綺麗だよ、メドゥーサ。すごく……普段の君も、いやらしく喘ぐ姿も、全部のメドゥーサが俺は好きだよ。大きくても、小さくても、それは変わらない」

耳元で囁くようにそれを告げる。

どんなメドゥーサも自分は好きだ、可愛いと思う。だから隠す必要なんてないし、ましてや恥に思う必要も無いのだ。彼女には——彼女の、全てを見せてほしい。

「あっ♡ ふあっ♡ やああ、はああんっ……♡ 嬉しいっ……マスターに、そう言ってもらえてっ……♡ んう、ひいうっ、はっ、うあっ……しゅきい、っ……大好きです、マスター……！ これからもずっと、私を見てくださいっ……んあああっ！！」

少女の嬌声が一気に艶を増す。

メドゥーサが隠す事をしなくなり、この時間もいよいよもって終わりの時が近づいている。少女の膣内を下から蹂躪する肉棒には、うずうずと欲望が満ち始めている。吐き出したい。そう思った時、彼女を突き穿つ腰の動きは際限なく加速した。

「んんっ、はあっ、これ、しゅごい……♡ 奥まで、来てましゅっ……♡ 下から突かれて、っ、子宮が潰れちゃいそうにっ……ンあっ、おちんちん、じゅぼじゅぼって……イッちゃいますっ……!! 子宮っ……こんこん、されてっ……んうううっっ♡」

浅い位置まで降り下がった少女の最奥。その入口を、亀頭は何度もノックする。持てる限りの体液と熱をぶつけ、彼女の膣内を自分の色に染めていくその様は、さながら刻印^{マーキング}だ。ほとんど半泣き状態のメドゥーサだったが、その顔に苦しさのような色は見られない。快楽を従順に味わう雌としての雰囲気だ。

「あついやつ……♡ イクところ、見られちゃいますっ……♡ もう限界ですっ、エッチなのが止まらなくて……あっ、んあっ、しゅごいの来ちゃいます、マスターっ……!!」

メドゥーサの身体がびくびく震える。もう十分に出来上がりつつある少女は、膣を限界まで収縮させ、肉棒を離すまいとして奥まで深く咥え込んでいた。

その意図というか本能的な願いを何となく理解する。——膣内射精。繋がったことの最大の証明が欲しいという事だろう。陰茎をのぼりつつある精液の全てを、その小さな体内に注ぎ込んでほしい、という——

「っ……イクぞ、メドゥーサ……！ 一番おくに——っ！！」

「はいっ、来てくだひゃいマスター……♡ ふやっ……これ、しゅごっ……おちんぼ、大きくなってますっ……！！ そのままナカに……膣内に、熱いのじえんぶ出してくださいつ、んあああっっ……！！」

腰を獣の如くに振るい、少女のロリ穴をこれでもかと蹂躪する。少女もまた、一心不乱に俺を求めてくれていた。

鏡は、そんな自分たちの交わる姿を正確に映し出す。立位のまま、絶頂を迎えようとしている自分とメドゥーサを。それを見て、子種は勢いよく放たれた——その直前。

「ああっ、あっ、んっ……マスター♡」

文字通り地に足突かぬ状態の少女が、うつろな様子で呟くには。

「んっ、イッ……今だけでいいです……私のこと、アナって……呼んでくださいっ……！
貴方に、もう一度っ……そうやって、呼ばれた……んっ、あっあんっ、ひゃっ、はうんっ……
」♡

涙交じりに伝えられたお願い。

意味や意図を考えることはしない。ただ、自分もそう呼びたいと思ってしまった。

「ああっ……イクよ、アナっ……！ アナの膣内に、全部出すッ……！！」

「来てっ、出してくださいマスター♡ マスターの子種、私に全部っ……♡」

パンパンパン。激しく肉を打ち鳴らす。

身体全体を使って俺を求めてくれたメドゥーサ——アナの願いに応え、一番深い部分で思いを爆発させた。幼い少女の膣内に、自分の全てを。それは確かに、爆発と呼ぶに相応しく。

——その瞬間。

「射るッ……!!」

「あっ、ああああああっ——……!!——でてりゅ、マスターの熱いの……私のオクで、おちんぼビュルビュルしてるっ……!! あっ、イクっ、んっ、んんっ……イクウウウウっ……」

どびゅ、びゆるるっ。気持ちの良い解放感が身体を包む。

アナの最奥、子宮を貫いた瞬間。肉棒は貯めていた子種の全てをそこに流し込んだ。

真正正銘の膣内射精。ロリサーヴァントのナカの体内を白く染め上げる。その背徳的な事に身体を震わせつつ、射精は爆発じみた勢いを終わらせた……が、その時。アナの身体が

小刻みに痙攣しだすのが分かった。純粋な絶頂とも違う。何やら、我慢が途切れたような。

「あっ、いやっ、止まってっ……！　はううん、でる、でちゃうう……！　ダメっ、んやああ、あっ、あっ、んんっ、んあああああ……♡」

アナの身体が弛緩する。

それと同時に、なにやらちよろろ……と水の流れる音が聞こえてきた。

「ん、んんう……マスターの前、なのにい……ぜんぶ、見られてるのに……はあああん♡」

恥ずかしそうに、けれども、恍惚とした様子で。

緊張の糸が途切れたアナの陰裂からは、放物線を描くように水が流れていた。

絶頂による潮吹き、ではないだろう。激しい虚脱感による放水。つまりはおもらしだ。少女は、イキながらにして漏らしてしまっている。

「ごめん、なさいっ……マスター、私……粗相を……っ」

流れ落ちた小水は下の——浴槽のお湯と混じるようにして消えていく。
自分としてはそんなアナの様子が可愛らしく、別段気にする事でもなかったのだが……
うん、皆が使う場所でもある。一応、お湯を抜いて洗っておくでしょう。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「どう、気持ち良い？」

「……はい。すごく温かいです。マスターに髪を梳いてもらうの、すごく好きです」

その後、自分とアナは更衣室で休息を取っていた。

洗面台の前に座り、そんな自分の上に少女が座り……濡れた髪をドライヤーを使って乾かしてあげる。頭を撫でるようにして髪を梳いてあげると、アナはひどく喜んでいた。

「今日は色々と迷惑をかけてしまいました。それに、恥ずかしい姿も……」

「ははは、俺はアナの可愛い姿が見られて良かったけどね」

「う……マスターは意地悪です、変態さんです。」

と言って、わざとらしく頬を膨らませてきたアナ。

その様子も可愛らしく、またいつか、彼女の可愛い姿を見たいと思うのだった。

霊基No.11 メルトリリス



PROFILE

身長：190cm 体重：33kg

快楽のアルターエゴにしてトップスタァ・プリマドンナ。
恋した相手には色々と容赦が無い。

魔力供給回数：159回 絶頂回数：96回
好きな体位：立ちバック 処女喪失日：召喚から7日目

妊娠確率：34% 【安全日】

『この』私を簡単に孕ませられると思わないことね』と
自信満々に言い放つが、一向に結果が表れないと
『どうしてデキないのよ』と不貞腐れる。

STATUS

絆LV 100  Next 0

性欲：C	★★★★☆	知力：B	★★★★☆
体力：D	★★★★☆	母性：B+	★★★★☆
従順：E	★★★★☆	反抗：A+	★★★★☆
淫乱：D	★★★★☆	感度：E	★★★★☆

『契約したんだもの。とことんまで尽くしてあげるわよ。
私に溺れる覚悟は良くて?』

霊基No.11 メルトリリス

SECRET GARDEN EX

SG1：不感症

触覚機能が低下しているため、基本的に感覚が鈍い。
それは性行為時にも現れ、最初の頃は中々イクことができず
不満な思いをしてきた。でも今は……………。

SG2：加虐体質

好きになった相手とひたすら「繋がりたいくなる」性質。
少女は積極的に「他人」を求めようとする。
そのため半ば暴走気味に快楽を貪ろうとするが、
そういう時は決まって防御力が低い。

SG3：独占欲

自己完結している彼女にとって相手の気持ちは関係ない。
自分だけが一方的に愛しているだけでそれでいい。
だけど相手が他の女性と話しているのを見るとそれはそれでムカつく。

WEAK POINT

body : ★★★★★

自慢の肉体。余計なものを排した、
究極の造形美。と本人は自負している。
特に脚が最強。

胸も「これ」が最高に美しいらしい。

arm : ★☆☆☆☆

触覚機能の鈍い彼女は、中でも手先の
感覚が致命的。それでも拙いなりに
手で奉仕を試みる彼女の姿は
あまりにも愛おしい。

vagina : ★★★★★

徹底的なGスポット開発によって人並み以上
の感度を手に入れた。入り口付近のお腹の
裏側を指で優しく刺激すると簡単に絶頂。
しばらくの間腰を浮かせて震え続ける。

LIVE



状態：♥♥♥

スキャンダルは避ける
べき。そうしたプロ意識が
レジストを続けている。
だけど最近母性が芽生え
つつある彼女は、ひっそり
と電撃引退を考えている。

メルトと幾たびの死線を超えて、以来、彼女との関係は確実に深まっていた。

快楽のアルターエゴ。両脚に鋼の具足を装着した、華奢で可憐な、プリマドンナ。

その魅力に取りつかれたのは何時からだったか——。

出会った瞬間、あるいは、出会う以前から落ちていたのかもしれない。どちらが先かはもう忘れてしまったが、互いを求め出すのに、そう時間は要らなかったのだ。

「ん……ちゅ、っ……じゅる、ちゅぶ、んっ、ぢゅう……んあ、んむっ……」

マイルームのベッドで抱きしめ合い、少女とのキスに熱中する。

甘く静かな時間。メルトとのこの関係は、もはや日常的なものとなっていた。

オフの日は、カルデア内を二人でデートとばかりに散歩して。その後は彼女の趣味である人形制作を手伝ったり、人形談義に付き合ったりと……そして最後には、決まって彼女の身体を求めていた。

のだが——

「ぐ、っ……!?!」

「あら、どうしたの？ まだたったの七回でしょ？」

「もう、無、っ……………！」

「弱音なんて、らしくないのねマスター。まだまだこれから……………身も心も、魔力の一滴さえも絞りつくしてあげる。イクわよ——イクわよ、イクわよ、イクわよ、イクわよっ……………！」

誤算だった……………まさかメルトに、こんなスキルがあったなんて。

俺に跨ったその上で、少女は激しく腰を乱舞させる。どれだけこちらが悲鳴を叫ぼうが、射精しようが、お構いなしだ。そこには嗜虐的に微笑む、少女の恍惚とした笑みが浮かんでいた。

「っ……………射、ッ……………！！」

「ふふっ……………♡ その顔……………ゾクゾクしちゃう……………♡ ええ、ええ、たまらないわっ……………！！

貴方のその可愛らしい悲鳴……もっと私に聞かせなさいっ……!!」

もはや何度目となるかも分からない絶頂に襲われる。

心身共に疲れ果てた上での射精は、既に気持ち良いだとかそうした範疇にはない。ただただ泣きたくなる、恐れのようなものを感じさせた。

「ふう……少しはしゃぎ過ぎたかしら？ 貴方もそろそろ限界のようだし……今日はこれでお開きにしましょ。またね、マスター。今日はとても楽しかったわ♡」

(取られた……ぜんぶ……絞り、取られた……)

長い長いその時間が終わると、メルトは大変ご機嫌に部屋を去っていった。

反対に俺はベッドに倒れ込んで……激しい虚脱感、疲労に、ただの一步も動けずにいた。

——これがメルトの『騎乗』。馬や車ではなく、人に乗る事に特化した能力(多分)。

後悔と恐怖、それに敗北感の如き感情が自分を襲った。
 恐るべしメルトリリスの騎乗スキル。そんなこんながあつたのが、つい先日的事

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「それで——は、ここの造形が——で——特に素晴らしい——から——
 で——」

ある日の夜、自分の隣ではいつものようにメルトが居座っていた。

ベッドの上で並ぶようにして座っている少女は、とても饒舌に言葉を走らせている。自分はその静聴。唯一の聞き手として、彼女の話を静かに聞いていた。

「つまりね、あの人形は——フィギュア……って、どうしたの？ そんなにじっと見つめて……
 何か……私の顔に付いているのかしら？」

すると、メルトが首を傾けて見つめてきた。

まじまじと見つめすぎていたのだろう。少女は少し照れたようにして頬を赤らめる。もちろん何か理由があったわけではない。ただ、楽しそうに語る彼女の表情や雰囲気がとても愛おしくて、ついつい視線を奪われてしまった……それだけの事なのだ。

「そ……そういう事を正直に言わないでほしいわ。私まで恥ずかしくなってくるじゃない……」

若干気まずそうにして顔を背けるメルト。自分としては本心を告げただけにすぎなかったのだが、少女にはそれがどうやら耐えがたい事だったらしい。

暫しの空白。メルトが視線を逸らし、自分も言葉を発せずにいた数秒……そうして次にメルトが振り返った時、互いに見つめ合ってしまうのは必然だと言えた。その瞳に吸い込まれ、求めるようにキスをする。いつもと同じ、彼女が欲しいという合図サインだった。

「んっ……ちゅ、んむっ……れろっ、んじゅる、ちゅう、んっ、はあんっ、ふっ、ううん……あむ、くちゅ、っ、うん……ぢゅる、れるっ……んくっ」

メルトの小さな舌が自分のそれと絡み合う。

お互いに目を閉じているため、相手の表情を知る事はない。だが、肌を通して伝わってくる体温や心臓の鼓動に、相手も自分同様、緊張している事を理解した。

「んんっ……ぶあっ」

恍惚とした顔。紅潮した頬。唇と唇の間を、涎が一条の架け橋として繋ぐ。改めて視界を開くと、少女の艶然とした表情が目の前にあった。

「ふふっ……貴方のここ、もう既にガチガチじゃない。服の上からでも分かるわ。ほら……ピクンピクン、ってしてる……♡」

さすさすと、少女の柔らかな手つきが股間をまさぐった。

自分の目にも分かる程の勃起を果たした肉棒の、ちょうどくびれに相当する部分を……メルトは、子猫の頭を撫でるかのように優しく撫でていた。

今更隠すつもりも恥じる必要もない。雰囲気を整えば、どちらが先という事もなく、求

め出すのが自分たちの関係だ。故に、これから始まる行為に異論だとか躊躇いだとか、そんなものは微塵としてなかった。が、その前に――

「え？ 今日自分主導でいかせてほしい――？」

いそいそと支度を始めていたメルトに、緊張した声でそれを告げた。

少女からしてみれば、俺の要望は全く予想もしていない方向から飛んできていたのだろう。だが程なくして、その意図というものを少女も理解する。納得した瞬間、メルトは悪戯な笑みを浮かべて。

「ふうん……まあいいわ。貴方も立派な男の子ですし？ 私に搾り取られてばかりでは、色々立つ瀬がないものね。……ふふふっ♡」

「ぐっ……」

他意は無い、と一応伝えてはみたものの、やはりメルトには見抜かれていたようだ。

自分主導でとお願いしたその意味。勿論、それは彼女の手強さを考慮しての事だった。一度メルトに跨らせてしまえば、枯れ果てるまで搾り取られるのが目に見えている。それではダメだ。男として、一度くらいは勝っておきたい。難攻不落とも言える少女の余裕を打ち崩し、自分も男だという所を見せつけてやりたいのだ。

「——と、いうわけで。先手は俺から行かせてほしいんだけど……いいかな？」

「ご自由になさい。貴方が何をしてくるのか……今からとても楽しみだわ」

そう言って、メルトが自分の膝上に座ってくる。

俺に全てを預けた上で、挑発的な視線を向けてきた。

「たまには貴方のお人形になるのも……悪くはないわね。ほら、好きにしていいわよ。返り討ちにしてあげる」

「ああ、手加減抜きで行かせてもらおうぞっ……!!」

人形のように繊細なメルトの腰に手を回す。

あくまで余裕な少女に対し、自分も逆襲という名の愛撫を開始した。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「んうっ……あ、っ……手、おっきい……くう、んっ……はあ、マスター……♡」

膝に座らせた状態で、メルトの身体を後ろから弄ぶ。

先手は許された。だから、少女も暴れたりはしない。じれったいような、もどかしいような責めを、メルトは静かに受け入れる。

「胸……そんなに、触らないで……その……貴方の好みには合わないから……」

「そんな事ないよ。俺はメルトの胸、すごく好きだよ……」

「っ……バカあ、んっ……♡ はあ、んあっ……これ、すごくっ……うあっ♡」

ウエディングドレスのような服をたくし上げると、その下から慎ましくもいじらしい双丘が姿を覗かせた。小振りな膨らみである。それをメルトはすごく恥ずかしそうに顔を赤らめていた。

もちろん、彼女の身体に恥ずべき部分など存在しない。掌で収まる程度の膨らみではあるが、寧ろ同程度の背格好の少女に比べると「ある」方で、その柔らかい弾力は瞬く間に自分を虜にした。

「んんっ、んっ……っあ、あんっ……はあ、うんっ……んっあっ、はっ……♡」

人形のように無抵抗なメルトは、それはそれで新鮮だった。

いや、人形のようにと形容したのは、なにも振舞いだけではない。彼女の表情も、全身も、こうして見ると人形のように精緻で美しい。普段から自身の肉体を「完璧」と豪語するだけの事はあると思う。肉付きは幼いのに、それがひどく魅力的だ（自分がロリコンというわけではなく）。

「あつ、指……くりくりつて……♡ 焦らすみたい……♡ んっ、それダメ……感じちゃう、からっ……♡ んっ、はっ……あつ、ンああ……くっ、んう……♡」

いつの間にか、メルトの胸に浮かぶ桜色の領域は張りつめたように勃起していた。

いじらしく起立する二つの突起。小さいが確実に立ち上がっていた少女の乳首を指で弄り回すと、明らかにこれまでとは違う艶めかしい声でメルトが叫び始めた。

思えば、彼女がこれほどまでに乳首を立たせた事は今まで見た事がない。ヤってる最中でさえ、大人しいままだった事がほとんどだろう。

(そう言えば……メルトって、確か『触覚』が鈍いんだよな。もしかして……今まではそんなに感じてなかったのかな……?)

話に聞いていたメルトリリスの特性。神経障害——触覚機能の低下。

常人よりも刺激に対する反応が鈍い彼女にとって、ある程度の快楽は「快楽」となり得ないのかもしれない。だとすると、愛撫によって得られる恩恵は大きいものがあるだろう。勝

ち負けではなく、そう、これは彼女に気持ち良くなってもらうための愛撫として――

「っ……あっ♡ あっ♡ それっ……んっ、ひゃうっ……♡ 指、トントンされるのっ……
お腹、気持ち良くなっちゃ……あっあっ、マスター……んっ、あぁっ……それっ、らめっ……
♡」

突如として責め方を変えた愛撫に、メルトが甘く溶けた声で泣き叫んだ。

何も敏感な部分を責めるだけが快樂の全てではない。自分が意識したのは、メルトの身体を作り替えるという事――開発だ。感じやすい肉体にするためにも、単純な刺激を与えるだけでは芸がないだろう。

脇、首筋、太もも……胸元とは違う、マッサージのような手つきで全身を撫でまわす。あるいは、お腹の上から子宮をノック。そうする事で、神経障害を引き起こしているメルトの身体にも何らかの変化が訪れるかもしれない。

（やつ、あっ、あぁっ……♡ こんな、初めてっ……んっ、くんっ……マスターの手に……私の身体、作り替えられちゃってるっ……不愉快なはずなのに、これっ、嬉しくなって



身体をビクビクと激しく震えさせているメルト。

かれこれ二十分くらいは愛撫を続けただろうか。

今までに見た事のない彼女の様子に、必然と興奮が高まっていく。そのまま、少女の身体をベッドに押し倒して――

「きゃっ……んん、っ……急に何を……あっ、やあんっ……♡」

四つん這いに倒れた状態で、メルトが艶めかしい悲鳴を叫び出す。

四肢をつく獣の如き姿勢。肝心な部分をファウルカップ状のプロテクターに守らせただけの、ほぼほぼ全裸に近い姿の少女。そのため、彼女の可愛らしく形の整ったお尻は簡単に現れてくれた。唯一、隠されていたその部分も、プロテクターを外す事によって開示され――少女が未だ子供の肉体である事を証明する、幼い割れ目が姿を覗かせた。

「メルトの……すごく、濡れてる……」

「そんな事、っ……私が、この程度で……」

ぐじゅぐじゅに濡れていたその陰裂を目にされて尚、おそらくは強がりだろう台詞を少女は吐き零す。それも彼女らしいと苦笑しつつ、今度は下半身への愛撫を開始した。

「っ、あ——んあ、はっあんっ、ふう、ううんっ……♡ 中、ぐりぐりって……♡♡
あっ、あっ、んっ、ふっ……なんで、こんな、気持ち良く——んっ、んううっ……♡」

綺麗な縦スジに指を挿入し、膣内を軽く探索、するとメルトが身体を大きく震わせた。これまでの愛撫で相当感じていたのだろう。少女の陰部はいやらしい涎でびしょびしょに濡れている。それに、内部も程よくトロけていた。普段のメルトからは想像もできない姿だ。

「もしかして、けっこう限界？ 少し手加減する？」

「馬鹿に、しないでっ……!! これくらい、なんて事——くひゃうっ……♡」

強がりを書いてみせるメルトだが、余裕が無いのは火を見るよりも明らかだ。

自然、彼女のその虚勢を崩してやりたいと本能が叫び出す。指をさながら陰茎に見立てて膣道を蹂躪。ぐちゅぐちゅとわざとらしく音を立てると、恥ずかしそうにメルトがベッドに顔を埋めた。

ぐちゅ、ちゅ、ぬちゃ。愛液は面白いように弾け飛ぶ。それは最早、一種の洪水だ。際限なく溢れ出す少女の蜜液に、自然と、吸い込まれるようにして唇を近づけ——

「あっ、あああああっ……!! それ、ダメっ……♡ 舌で、なんて——んっ、ふうっ……

♡ あっ、ンあ、マス……ター……!! ふあっ……やっ、あんっ……あっ、ふっ、んんっ……♡」

口淫。メルトの陰裂に顔を押し付け、発情し切ったロリ穴に舌を差し込んだ。

(何よ、これっ……んっ、いやらしい音が、響いてきて……頭、クラクラするっ……♡ 身

体、熱くなつて……息、できないっ……だめっ、こんなの、知らない——♡

ベッドシートで押さえつけ、押し寄せる快感を必死に耐えているメルト。

今の彼女がどんな表情をしているか……見たい気もするが、ここは我慢しよう。そのまま口淫を続行、流れる蜜液を啜るかの如くに吸引。熱く、そして甘い涎の味わいに喉を鳴らしつつ、更に奥深くへと舌を突き入れる。

「あっ、ひゃっ、んっ、んんっ……♡ あっ、あっ、んっ、あうんっ……♡」

弱々しい、それが今のメルトを見ての率直な感想だ。

尊大だった普段の姿を忘れさせる程に、力なく震える少女の身体。ふーっふーっ、と息を荒くするメルトを見て、込み上げる思いがあった。

彼女の自尊心というか……プライドを打ち崩し、鳴かせてやりたい。

普段から高貴に振舞う少女だからこそ、徹底的に弱めたい。

嗜虐的な思いは、行為として激しさを増した。指、もしくは舌による膣内への愛撫。何十分という時間を掛けて解してやれば、神経障害なども関係ない。メルトの身体はもう十

分に来上がっていた。

「んうあつ、あんっ、はっ、やあつ、そこ、つ、はあんっ……♡ こんなっ、こんなのっ……
我慢できないっ、イクっ、イクイク、イっちゃうっ、んっ、んうううっ……♡」

身体を小刻みに震わせ、膣を収縮し、メルトは限界に近い事を告げてくる。

まさかという思いに戸惑いながらも、自分も愛撫を加速させた。指を激しく出し入れし、膣内を乱暴に攪拌する。腕が攣りかける程の勢いで、減速する事なく掻き回し――

「っ――んっ、あああああっ……♡ あっ♡ あっ♡ やっ、止まらなっ……♡」

ぷしゃっ、ぷしゃあああ。

絶頂へと達した瞬間、少女の陰裂からは盛大に潮が吹き出された。

本当にまさかという思いである。あのメルトが自分の指でイッた――事に対し、信じがたい気持ちと共に達成感で満たされた。というか、もしかするとメルトがイッた姿自体、初めて見たかもしれない。

「はあ……はあ……♡」

ベッドに倒れ込み、メルトは茫然とした様子で息を吐く。

緩み切った雌穴からはちよろろ……と蜜液が垂れ流されていた。何とも卑猥な光景である。こんなにも幼い割れ目が、いやらしくも口を広げているなんて……だが、そうやって余韻に浸っていたのも束の間。

「っ……!!」

(あつ、やっぱり相当怒ってる……謝った方がいいかな……)

やがて此方を振り向いた少女は、わなわなと肩を震わせていた。

眦は強く細められ、誰が見ても睨んでいるのは明白と言ったように。

「ッ————!!」

瞬間、メルトが勢いよく飛びついてきて——殴られる事は覚悟し、反射的に目を閉じた。だが、想像していた筈の痛みは訪れない。恐る恐る目を開けると、すぐ近くに少女の顔があった。

「メル……ト……?」

「もう無理……我慢できないわ。早く、欲しい……早く、早く……♡」

そんな、卑猥に過ぎる様子でおねだりをする少女。

抱き着いてきた事で、彼女の顔はほんの数センチという距離にあったのだが……その表情は何というか、とにかくエロかった。目鼻立ちは小学生のように幼さを残しているというのに、顔を赤らめ、涙ぐむその素顔はまさに雌の顔とでも言うべきか。

上品さを欠いたメルトが、こんなにもエロいだなんて……。取り戻しつつあった理性は、一瞬にして瓦解した。次の瞬間にはもう、彼女の身体を再び押し倒していた。

「んっ……あっ——貴方のっ……はやくう……♡」

扇情的な様子でメルトは俺を見上げている。大股を開き、自ら腰を突き出して……覆い被さらんとしていた俺を、涎を垂らして待ちわびていた。

こんなメルトなんて、そうそう見られるものではない。彼女としては今すぐにでも挿れてほしい思いなのだろうが、せっかくなので少しだけ苛めてみようと考え——

「やっ、あっ……はっ、はあっ……♡ あっ、んっ、うっ……はっ、んあっ……ああっ……♡」

ピッタリ閉じた入口に亀頭をあてがり、焦らすようにして愛撫。そうするだけで、少女が辛くもどかしい吐息を吐き出すようになった。

それだけではない。自分は肉棒に手を添え、入るか入らないかといった具合に焦らしていたわけだが——無意識、本能的な動きだろう——メルトは自分から腰を浮かして、せがむかの如くに亀頭を啜え込もうとしていた。

(はやくっ♡ きてっ、はやくっ……♡)

もはや我慢も限界と言った様子で見上げてくるメルト。

流石にこれ以上は苦しいだろうと感じ、潔く挿入の準備を整えた。

「行くよ、メルト。このまま、中に——」

「あ……んっ、はっあああっ——……!! き、きたっ……♡ ん、いっ……お、あっ、ああんっ、んっぐっ……マスターの、おちんぽっ……挿入、った……っっっ!!」

容赦のない突きが彼女の貫いた瞬間、少女はのけ反り、またしても絶頂した。

「あっ、っ、はああっ……♡ おちんぽ、奥までえ……ひっ!？」

恍惚としているところ悪いが、正直、手加減はしてられない。ただの挿入でイッた事もそうだし、何よりもこんなにエロいメルトを見せられたら色々と抑えられなかった。

「ひ、あっ……いき、なりっ—— あっダメ、今はっ……♡ いまは、らめえっ……♡」

ㄷ字に開かれた両脚の、その間にある割れ目で以て肉棒を咥え込み——

腰を奥深くまで突き出すと、メルトは恐怖するように泣き叫んだ。が、そんな彼女の懇願を無視してストロークを開始させる。小さなメルトの肉体を完全に押さえつけ、腰だけを思い切り前後する。

ぢゅぶ、ずりゅ、ぢゅぽん。肉棒は何度も何度も彼女の膣道を行き来した。征服感。幼い少女を力で屈服させているという実感が、身体の動きに勢いを与えてくれる。

(メルトの膣内……初めての時よりも締め付けて……それに、戻そうとすると必死に吸い付いてくる……！メルトのメス顔、本当にエロい……！)

「はあん、あっ、ああっ……奥っ、子宮、子宮にいっ……♡ 貴方が、あ……これ、しゅきいっ……！もっと、もっとお……っ！！」

それまでの威厳だとかをかなぐり捨てて、メルトは貪欲にも俺を求めてくれていた。気を抜けばすぐにでも射精してしまいそうなほどに刺激的な彼女の腔奥おく。少しずつ掘り進めて、ようやく辿り着いたその場所は、いつもより若干浅い気がしなくもない。おそらくは、何十分という愛撫によって子宮が降りていたのだろう。妊娠——子種を欲するべく。

「やっ、そこっ……入口っ……んっ、ふううううっ……♡ 好きっ、好きっ！ ずぶつて、されるの、好きっ……好きっ！ はっ、あっ……ぐりぐりっ……子宮に、キス……気持ち、良いっ……んあっ、はあっ……くう、んっ、はっ、ああっ……！！」

もっと奥まで欲しいと、声が、子宮が、肉棒に呼び掛けてくる。

ふとして見つめた少女の顔は完全に雌の表情をしていて、自分の脳を甘く溶かしていた。

「マス、ター……キス、キスう……ー！ んっ……じゅる、ぢゅ、んちゅっ……んむっ……ぢゅるるっ、ずじゅうう……ふっ……ん……ちゅる、んくう、っ、ぢゅうううっ……♡」

両手を上げ、口付けが欲しいとねだるメルト。

その要望に応えるようと、身体を深く沈ませる。メルトの身体を更に強くベッドに押し付け、差し出された小さな舌を吸い取るようにして唇を交わす。

「じゅるるっ、ちゅっ、んちゅ……えろっ、くちゅ、んっ、ふっ……あむっ、んぢゅるるっ♡」

口内と膣内。二つの穴を同時に犯しつつ、いよいよ以て興奮が抑えきれなくなってきた。この少女を孕ませたい——種付けしたいと欲望が叫ぶ。幼いその身体を自分のものにしたいと、肉棒は男としての本能に震えている。

「っ……イクぞ、メルト……！ 膣内につ………！」

理解した瞬間、動きは早かった。少女を完全に押さえつけ、逃げられなくした上で腰を振る。メルトの方も拒むつもりはなく、俺の背中に両脚を回し、一番深いところで受精しようと抱き着いていた。

ああ、もう耐えられない。確実に孕ませる。そうした思いが欲望を爆発させる。

膣内全体が吸い付いてくる感覚。同時に鳴り響くメルトの嬌声。それが合図と、瞬間、肉棒は勢いよく衝動を弾けさせた。

——びゅうううっ！　びゆるっ！　どびゅうううっ、びゅーっ、びゅーっ……！！

「ひあっ……あっ、あああっっ——♡　熱い、熱いのっ——びゅうううって、お腹……子宮っ、叩いてっ……んっ、あっ、はああ——マスターの、子種でっ……子宮、いっぱい……♡」

酩酊するような心地良さ。

一ミリの隙間もなく子宮口と勃起の先端を密着させ、精を吐き出し続ける。

びゅっ、びゅう、びゆるっ。精液全てを、メルトの子宮に——少女の子供部屋へと抽入。快感に腰が震える。幼い身体を強引にプレスした状態での種付けに、肉棒は狂ったように射精を続けた。

「んっ……ちゅむっ、ちゅっ、ちゅうう……ちゆる、ちゅばっ、れるっ、れるっ……れるおっ、

んちゅうう……んう、んっ、んむっ……♡」

吸い寄せられるままに再びキスを重ねる。

視界は明滅し、意識もおぼつかないが、それでも——互いを求め出す。

「あむ、んちゅうっ……ちゅうっ……ちゅっ♡」

少女の様子は今までの未練を爆発させたが如き激しさがあつた。

神経障害を持つメルトにとって、他人というのは理解の外にある存在である。触れ合いたくとも、触れ合い方が分からなければどうしようもない。今までそうやって何度と諦めてきたのだろう。だからこそその爆発……と言った具合か。となれば——

「もっとしっかり刻んであげないとな、メルト」

「!!…んっ、あ……やあ……はあっ……あつ、あああああっ……♡」

その後——少女をうつ伏せに寝かせ、それを上から抑え付けるように。いつもと立場を逆転。そのまま二人体力が尽きるまで、一晩中セックスして過ごした。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

——事後。

「あの一……メルト、さん？」

「……………」

「もしかして……機嫌、悪い？」

「……………ふんっ」

膝上でこじんまりと座るメルト。だが、その様子は明らかに不機嫌だった。

ワケを訊いてみると、メルトは口を尖らせて。

「当然じゃない。あんな……あんな……醜態を、晒すなんてっ……!!」

(ああ、メルト的にあれはやっぱり醜態なんだ……)

思い出されたのは、少女の乱れに乱れたその様子だ。常に上品さを意識したところのあのメルトにとって、その姿とは耐えがたいほどに恥ずかしいものだろう。

「貴方のせいだからね。貴方の……責任、だから」

消え入りそうな声でメルトは不満を告げる。

自分としては、そんな彼女の姿も新鮮で良かったと思うのだが……

「不愉快よ、屈辱だわ……! 罰として、しばらくこのままできてっ」

拗ねたようにしてメルトは命令を告げた。

その内容は、膝上に座る自分を、強く抱きしめてほしいという事。

なんだ、そんな事ならお安い御用である。

人形のように可愛らしい少女を抱きつつ、甘んじて罰を受け入れるのだった。